

2022（令和4）年度

海外学外研修（オンライン実施）インド

～仏教学基礎とインドの亡命チベット社会～

名古屋市立大学人間文化研究科「人間文化研究H」
／人文社会学部「海外フィールドワークA」実習報告書

名古屋市立大学

人間文化研究科／人文社会学部国際文化学科

〈目次〉

1. はじめに	2
2. 自己紹介	6
3. 授業スケジュール	7
4. 読本と日本語訳	11
5. 学生レポート	44
・四聖諦について	44
・インドの亡命チベット社会における教育とその課題	48
6. 授業の感想	52

1. はじめに

本報告書は、2022 年度に開講された、名古屋市立大学人間文化研究科「人間文化研究 H」および同人文社会学部「海外フィールドワーク A」の成果報告書である。

【経緯】

名古屋市立大学人間文化研究科・人文社会学部が実施する複数の研修やフィールドワーク系科目は、2019 年から引き続くコロナ禍の影響で中止や延期を余儀なくされて 3 年が経とうとしている。人と人とは「物理的距離」を取らざるを得ず、インターネットを介したコミュニケーションが日常になってきた。2022 年春ごろからは屋外でのマスク不要ルール（政府発表：2022 年 5 月）も出てきたが、公共移動機関内や会話をする場面での着用は継続されており、未だ街行く人はマスク着用者が大多数を占める。

学生の海外渡航に関しても、本研修を計画した 2021 年冬時点では本学では許可されていなかったもので、「できないことより、できることに目を向けよう」の精神で、オンラインでの研修実施を計画した。

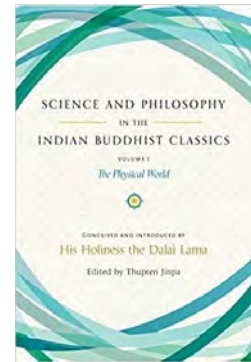
【名市大生の特性を活かす】

オンライン研修が有効であるという確信は、2021 年度に試験的に実施していた 9 か月間の自主セミナー経験に基づいていた¹。インドに居住する亡命チベット人と交流してチベット文化について学ぼうとオンライン・セミナーを実施した時の経験では、おしなべて名古屋市立大学人文社会学部の学生は、初対面で事前情報が少ない状況で臨機応変に話しかけたりインタビューしたりするのは極端に苦手だが、事前学習が可能で複数回対話を重ねた相手にだと、丁寧に礼儀正しく応対でき、事前学習の内容に沿って知的な質問や思考も深化できることを認識していた。そこで、チベット文化を理解するために、チベット人の精神性の根幹を顕現するような書籍を輪読するテキスト購読のパートと、画面越しとはいえ生身のチベット人と実際に会話する時間を持つことで、リーディング・リスニング力の強

¹ 筆者が名古屋市立大学の有志の教員と学生に声をかけて「チベットのお坊さんにインタビューしよう」「可能であれば、2022 年にダライ・ラマ 14 世にもインタビューしよう」と企画した英語のスキルアップをめざす自主セミナー（2021 年 5 月～2022 年 1 月）。先方は、Ven. Geshe Palden Wangchuk, Abbot of Jangtse Monastery; ジャンツェ寺院僧院長、Ven. Geshe Lodoe Sangpo : メイン講師のロドエ・サンポ仏教学博士、Mr. Jigmey Tsultrim (Coordinator, Indo-Tibet Coordination Office, New Delhi) : 通訳補助。当方は、名古屋市立大学の教員数名（榎木ほか、英語教師 3 名）、名市大の有志学生 5 名（当初は 11 名だったが、最終的に残ったのは 5 名）。インド側にいるチベット寺院関係者と ZOOM 接続のうえ、チベット社会や歴史についてセッションし、それを日本側でフォローアップして英語スキルやインタビュー技法をブラッシュアップする。英語コミュニケーション力の強化が目的だったが、教員や僧侶は非常に熱心だったものの、学生たちは概して受動的で、使用言語が英語であるということやチベット文化および難民の生活には興味あるものの、仏教への興味は薄く、知識もないので、参加者間の参加度合いがうまくかみ合わず、正直なところ空回り感が強いものだった。このとき名市大の学生の特徴の一つは、Reading や Writing はそれなりに強いが、Listening と Speaking には重点的なインプットと訓練が必要なことを認識した。

化と思考力の深化、対人コミュニケーション力の向上が期待できるのではないかと考えた。

この観点から知己の亡命チベット人複数（僧侶、俗人）に相談してみたところ、テキストとしては、“Science and Philosophy in the Indian Buddhist Classics,” (Vol.1) が良いと全員が答えた。この書籍は、チベット語で書かれた仏教入門書の英訳で、チベット亡命政府が立地するインドのダラムシャーラー（ヒマーチャル・プラデーシュ州）のチベット文献図書館（the Library of Tibetan Works and Archives）が実施する初心者向け講座のテキストでもあり、特に外国人に定評がある²。また、基幹書籍であることから、亡命チベット社会の教育機関では、小学校高学年のチベット人子弟がこのテキスト（チベット語か英語かは教育機関の方針による）を用いて社会科を勉強する。つまり、亡命社会が成立した1960年以降、このテキストは亡命社会の子弟教育にも使用されているもので、チベット人の生活の基底を為すチベット仏教の基礎的な教えについて学ぶのに最適であるということだ。こうして、仏教の概説書（英語）の購読と日本語訳を通し、チベット仏教の基礎とチベット文化の根幹を学ぶことにした。



【亡命チベット人定住地ムンゴッドとジャンツェ寺院】

このような経緯の末、チベット仏教ゲルク派のジャンツェ寺院の僧院長の許可を得て、同寺院の僧侶（Ven.Geshe Lodoe Sangpo）をメイン講師として ZOOM クラスを実施することとなった。先述した2021年の自主セミナーでの講義経験もある僧侶である。彼もこのテキストの使用を強く推した人物の一人で、過去には仏教者が科学を学ぶためにエモリー大学（アメリカ合衆国ジョージア州アトランタ）に派遣された僧侶団の一員も務めた³。現在は帰国し、ジャンツェ寺院に在籍している。



² 但し、外国人就学者が好むのは、vol.1(The Physical World)ではなく、次刊 vol.2(The Mind)であり、vol.1を飛ばしていきなり vol.2を就学しようとする者が多いという。このような状況を憂い、チベット文献図書館関係者は「基礎を学ばずに一足飛びにより上位を学ぼうとするのは、建物の1階基礎をきちんと造らずに2階を建てるようなものだ」と嘆息するのを何度も聞いたことがある。私が今回意見を求めた僧侶・俗人の亡命チベット人複数人も同様の意見を持っており、vol.1からの地道な学習を要望したので、その勧めに従い、vol.1から順当に学びを進めることとした。

《参考》 Thupten Jinpa (ed.), “Science and Philosophy in the Indian Buddhist Classics,” Vol.2 (The Mind), Wisdom Pub., 2020.

³ チベット亡命社会からのアメリカ派遣（Emory University への留学）を報じる記事。

<https://www.sandiegouniontribune.com/sdut-tibetan-monks-studying-science-at-emory-in-atlanta-2010dec30-story.html>

<https://www.loe.org/shows/segments.html?programID=13-P13-00040&segmentID=6>

ジャンツェ寺院は、インド共和国カルナータカ州ウツタル・カンナダ県ムンゴッドに立地する。1950年代の「チベット動乱」を受け、1959年にダライ・ラマ14世がインドに亡命し、その後を追って大量のチベット難民がインドに流入した。



1960年にはインドにチベット亡命政権が樹立され、難民の生活の安定のための定住地の建設（難民キャンプが定住地に発展）や難民子弟の教育機関が建てられていくが、ムンゴッドはこの亡命初期の1966年に建設された定住地で、単独の定住地としてはインド最大規模である。この定住地内に再建されたチベット仏教ゲルク派寺院のひとつがガデン寺ジャンツェ僧院である。

【オンライン研修とその展望】

テキスト購読だけでは学生の興味が続かないかもしれないことと、対人コミュニケーション力の向上および調査手法の修得のために、隔週でフィールドワークの要素も入れた。インドに難民として暮らす亡命チベット社会についてのオンライン踏査を行って、調査やインタビューの基礎を学んで人びとの生活実態を調査するよう設計した。こうして研修の構想が固まり、学生募集の運びとなった。チベット学が設置されている仏教系の他大学にも声をかけ、テキスト購読を行う上での知的インプットを依頼し、こちらからはオンライン踏査で寺院や僧侶とコミュニケーションする機会を提供した。名市大の学生がテキスト読解上の学びを深められたとしたら、それはこれら他大学からの参加者の知的投入の成果である。購読したテキストは日本語訳を作成し、オンライン踏査の部分と合わせて報告書を作成するというのが、可視化された成果物のひとつになる。これら全体がうまくいけば、望むらく来年（2023）度にはコロナ禍が明けていることを期待して、実際に現地を訪問するスタディツアーに発展させたいと構想している。

こうした挑戦的な試みに名乗りをあげた学生は最終的に4名だった。国際文化学科には1学年あたり70名程度が在籍しているから、受講対象は1～4年の280名である。4年生は卒業年次で1年をかけた研修の受講可能性は低いとしても、1～3年生は210名。4名というと3学年全数の2%である。研修の説明会には十数人が集まったが、授業登録の段階で残ったのはこの4名で、いずれも2年生だった。授業開始の自己紹介を聞いていると、他文化への興味とオンラインであった点が受講動機のような感じだった。その後の各授業での発

表内容やオンライン踏査での質問内容を参照すると、デジタルネイティブ世代らしい質問も多かった。それぞれがどのような気持ちでこの研修を受講したのかは、この報告書の中で明らかになる部分もあるだろう。楽しみである。

【謝辞】

本研修の実施に協力していただき、仏教学関係者にお声がけくださった嵩満也先生（龍谷大学国際学部国際文化学科教授：専門は日本の宗教）、研究室所属の院生さんをご紹介くださった能仁正顕先生（龍谷大学文学部仏教学科教授：大乘仏教、浄土思想、チベット仏教）には、この場を借りてご厚情に感謝申し上げます。

また、この研修の最初から最後までわれわれの道行きに同行し、日本語で読むことのできる関連書籍を絶妙なタイミングで紹介していただき、チベット仏教・社会に関する記述を丁寧に校閲し、適切な意見をくださった院生の浅井教祥さん（龍谷大学大学院文学研究科〔仏教学専攻〕博士後期課程）には、特にお世話になった。記して感謝申し上げます次第である。

2023年1月9日

榎木美樹

参考 URL

-テレ朝 NEWS 2022年5月23日付記事

「屋外・会話なし」でマスク不要 政府が正式決定

https://news.tv-asahi.co.jp/news_economy/articles/000255662.html

-NHK 2022年10月11日記事

「屋外ではマスク着用は原則不要」ルール PR へ 加藤厚生労働相

https://www3.nhk.or.jp/news/special/coronavirus/mask/detail/detail_12.html

研修テキスト

-Thupten Jinpa (edt.), “Science and Philosophy in the Indian Buddhist Classics,” Vol.1 (The Physical World), Wisdom Pub., 2017.

-Thupten Jinpa (edt.), “Science and Philosophy in the Indian Buddhist Classics,” Vol.2 (The Mind), Wisdom Pub., 2020.

2. 自己紹介

名前 学科学年

- ① 趣味
- ② 行きたい国
- ③ 好きな作家
- ④ マイルール
- ⑤ 人生のテーマ

佐藤さくら 国際文化学科 2年

- ① 漫画を読むこと。ワンピースとキングダムが特に好きです。
- ② 台湾に行きたい。一週間くらい滞在して台湾料理や観光地を巡って満喫したい。
- ③ 湊かなえさんが好きです。好きな書籍は「未来」には衝撃を受けました。
- ④ 一週間に4回以上はジムに行って体を動かしています。
- ⑤ 自分を嫌いにならない。

安藤詩織 国際文化学科 2年

- ① 音楽を聴いたり、美術館を巡ったりします。
- ② メキシコ。美しい海と美味しい料理を堪能したいです。
- ③ ジャーナリストの村山祐介さん。彼のルポ「エクソダス」は、私にとって大切な一冊です。
- ④ 家を出る前に、温かいものを飲むこと。
- ⑤ やりたいことはすべてやる。

岩田芽生萌 国際文化学科 2年

- ① 漫画、アニメ、映画鑑賞。音楽も好きだし割と何でも好きになります。漫画はゴールデンカムイとモブサイコ100が特にお気に入りです。
- ② 時と場合によって変わりますが、最近ヴァイキングについての物語を読んだので、ノルウェーとか行きたいです。
- ③ サマセット・モームの「月と六ペンス」がすごく好きな1冊です。
- ④ 映画や本、演劇など、どんな創作作品でも心動かされたらその感想や思いを必ずメモするようにしています。
- ⑤ 自分を好きになれるように生きる。

堀テネシー順子 国際文化学科 2年

- ① 読書。主に19世紀の海外文学作品を読んでいます。
- ② チェコ共和国の首都プラハ。美しい街並みをもう一度見たいです。
- ③ フォードル・ドストエフスキー、レフ・トルストイ、エドワード・ゴーリー
- ④ 毎年ターキー(七面鳥の丸焼き)を三日かけて仕込み、クリスマスに食べます。七面鳥の肉はさっぱりしているので肉汁を混ぜたグレイビーソースをかけることをお勧めします。最後に骨だけになったら、ウィッシュボーンを折って願掛けをするのが恒例です。
- ⑤ 勇気と覚悟。

榎木美樹 名古屋市立大学 人間文化研究科/人文社会学部国際文化学科 准教授

- ① 移動すること。映画・ドラマ。温泉。
- ② 北欧、東欧
- ③ 島崎藤村、芥川龍之介、高橋和巳、石牟礼道子
- ④ 一日“三”善
- ⑤ 人生のテーマ：艱難汝を玉にす。明けない夜はない。信じる/楽しむ/諦めない。

3. 授業スケジュール

記録：受講生一同

- 5月6日 読本 Part 1: Overview and Mythology (pp.33-46)
初めての読本の日。メンバー全員の自己紹介の後、ゲシェラ⁴から教科書 pp.33-46 を要約した講義を受けた。
- 5月13日 映像フィールドワーク：Sera Jey Monastery, Bylakupe settlement
- 5月20日 読本 Ch.1: Systems of Classification (pp.47-48)
- 5月27日 映像フィールドワーク：Tibetan New Year 2022 - 100 challenges
動画を通して亡命チベット人が暮らす土地と環境、インド人との関係を観察。
- 6月3日 読本 Ch.1: Systems of Classification (pp.48-50),
Ch.2: Methods of Inquiry (pp.51-62)
特に Critical analysis and the "Four Reliance"
- 6月10日 映像フィールドワーク：Jangtse Monastery- over views
ジャンツェ寺院の紹介動画を視聴。寺院の周りの環境が森や開けた土地であることを映像から学んだ。
- 6月17日 読本 Ch.2: Methods of Inquiry (pp.51-62)
特に Ascertaining reality with three types of object
- 6月24日 映像フィールドワーク：India Untouched: Stories of a People Apart
インドのヒンドゥー教社会にあるカースト制度の中で、最下級として生きる「不可触民」の生活に焦点を当てた映像を見て、インドの日常に含まれる差別の連鎖と構造的暴力を学んだ。
- 7月1日 読本 Ch.2: Methods of Inquiry (pp.51-62)
特に Analysis grounded in the Four Principles
- 7月8日 映像フィールドワーク
1. "The Tibet Museum Promotional Video"
 2. "Tibetan Refugee" ; Photo archive
 3. "Gaden Monastery, Mundgod"

⁴ 【編者注】「ゲシェラ」（あるいはゲシェ・ラ）は、「先生」の意味で、「ゲシェ」は（仏教学）博士号を取得した人＝先生の意味で、「ラ」は敬称で、日本語で言うところの「さん」「さま」にあたる。われわれが「ゲシェラ」（先生）と呼称する人の個人名はロドエ・サンポ（Lodoe Sangpo）師である。

チベット博物館の紹介動画と昔の亡命チベット人の写真を観て、彼らが歩んできた歴史を学んだ。その後、ムンゴットにあるガンデン寺院の映像を視聴。寺院内の様子とお祈りを行う人々を観察できた。インド人は寺院の敷地に入るところから靴を脱ぐのに対し、チベット人は寺院内のみ靴を脱ぐといった寺院内外での様子の相違も学習した。

7月15日 読本 Ch.2: Methods of Inquiry (pp.51-62)

特に Causality and Dependent Origination

7月22日 映像フィールドワーク

1. “Buddhist prayer for Wisdom”

2. “Indian Society; Golden Temple and Sikh Religion”

文殊菩薩のお経を“Youtube”で聞いて感想や、このお経の特徴を共有した。

その後、2番の映像を視聴して、登場人物の動作から信仰している宗教やどのような人物関係であるのか予想した後、政府がヒンドゥー教以外の宗教を弾圧した時に閉鎖された歴史を持っている“Golden Temple”について学習した。

また、榎木先生のおすすめのインド映画“Rang De Basanti”を紹介。“Rang”は

「色」を意味し、“Basanti”は「春、サフラン色」を意味する⁵。サフラン色といえればヒンドゥー教を代表する色のため、“Rang De Basanti”は「ヒンドゥー教に染まれ」という意味にもとれる題名であると学んだ⁶。

7月29日 読本 Ch.2: Methods of Inquiry (pp.51-62)

8月10日 特別授業

⁵ 【編者注】映画“Rang De Basanti”は、2006年公開のボリウッド映画（ヒンディー語）である。タイトルは「Color it saffron」「paint me yellow」「Paint me with the color of spring (season)」などと英訳される。直訳は「サフラン色に染まれ」「黄色く色づけて」「春色に染まれ」となるが、詩的なタイトル表現でもあるため、ヒンディー語ネイティブに聞いても、「多様な意味を持つ」「面白い表現だ」との回答が得られ、端的にコレだ！という回答は得られない。映画の内容は、自主映画の製作をきっかけにインド独立の闘士の生涯と現代の生活世界を重ね合わせ、モラトリアム的な大学生が意思を持ったナショナリストになっていく物語である。

⁶ 【編者注】インド国旗に使用されている三色（サフラン色、緑、白）を宗教で見た場合に、サフラン色はヒンドゥー教の象徴色とされることから、この記述をした学生の解釈にもとめることはできる（ちなみに緑はイスラム教、白はその他の宗教とされる）。同時に、それら三色は理想・徳目とも解釈されており、サフラン色は「勇気」「自己犠牲」「真実への帰依」の象徴である（同様に、白は「純潔」「真実」、緑は「信頼」「豊穡」とされる）。宗教や親族の社会的地位を超えた学生たちの友情と国家へのまなざしを描く映画の内容に鑑みて、サフラン色に染まるべきは現代の若者であり、「勇気をもって立ち向かえ」「自己犠牲を恐れるな」という意味合いが「サフラン色に染まれ」に含意されていると考えられる。こちらの解釈に準じれば、どちらかというところ（先人の勇気ある自己犠牲の上に現在の繁栄を築いている現代の若人よ、誇り高い）インド人たれ」の意味合いではないかと編者（榎木）は考える。このタイトルの解釈については、研修中も考察の要素として提示はしたが、その情報を受け取った学生は、「ヒンドゥー教に染まれ」という意味にもとれることが強く印象に残ったのでそれを記載したのだろう。伝達とは難しいものである。

9月30日 映像フィールドワーク

Indian Society; food distribution in Delhi/ Mundgod

ムンゴッドの僧院と中継してもらった。僧侶たちは自分たちで家事を分担して生活しているということが分かった。ご飯や洗濯は僧侶自身ではなく、家事をする人が雇われていて、僧侶たちは自分たちの修行に集中して過ごしていると思っていたので驚いた。

10月14日 読本 復習

Analysis of 4 principles, 12links of dependent origination

10月21日 読本 Ch.2: Methods of Inquiry (p.59)

原因と結果について学んだ。

ゲシェラの言っていることはいつもよりも分かりやすかった気がする。

10月28日 映像フィールドワーク

Gaden Shartse Monastery

大人だけではなく、子どももたくさんいた。僧侶たちはコンクリートの床にずっと座っていたので足が痛くならないのかなと思った。

11月4日 読本 Ch.2: Methods of Inquiry (pp.60-61)

壺を例に挙げて原因的関係と内在的關係について考えた。

説明を聞いているときは理解できたと思ったけれど、質問してくださいと言われてたときはとても難しく感じた。

11月11日 映像フィールドワーク

Jangchub Choeling Nunnery

僧院に入ってから文字の読み書きを勉強し、それから仏教について勉強してゲシェマという学位を得たという尼さんの存在を知って、ものすごく努力された方なんだらうと感心した。

11月18日 読本 Ch.2: Methods of Inquiry (pp.61-62)

物事の存在の仕方には「原因と結果」、「内在している物」の2種類あるという考え方を学んだ。物事の存在の仕方について考えたことがなかったので、このような考え方もあるのかと納得した。

永遠の愛はないと言われてとてもショックを受けた。

11月25日 映像フィールドワーク

Mundgod Camp-2

お坊さんたちの問答の練習を見た。問答はとても早いスピードで行われているから難しそうに見えないが、実際にやってみるとしっかり考えて答えても反論され

るため、ゴールがない道がずっと続いているような感じで頭だけでなく、精神的にも鍛えられそうだなと思った。

12月2日 読本 Ch.3: Reasoning in the collected Topics (pp.63-64)

12月9日 映像フィールドワーク

Tibetan youth: Mr. Wangda (staff of Chief Representative Office, CTA),
Ms.Tenzin Wodhen (Student in a College)

バンガロールの CTA オフィスにチベット生まれの男性と北インド生まれインド育ちの大学生の女性がゲストに来てくれた。

女子大生の方は将来警察官になりたいそうだが、インドの国籍を取得してから警察官になるということを聞いて驚いた。

12月16日 読本 Ch.3: Reasoning in the collected Topics (p.65)

1月6日 映像フィールドワーク

Mundgod Camp-3

1月20日 読本 Ch.3: Reasoning in the collected Topics (pp.66-67)

一度概念ができてしまったら物質が無くなってしまってもその物はなくならないという考え方を知った。

1月27日 読本 Ch.3: Reasoning in the collected Topics (pp.68-70)

トリレンマ、テトラレンマの考え方は、紙などに書き出して考えると分かりやすいが、頭の中だけで考えようとする、すごく混乱した。

授業風景



4. 読本と日本語訳

本章は、“Science and Philosophy in the Indian Buddhist Classics,” (Vol.1) を、ゲシェ・ロドエ・サンポ師の講義で補完しながら日本語訳したものである。下訳は本学の受講学生が各担当部分を訳出した。各部分を集約した全体の訳を、仏教学的な観点も踏まえて整えたのは、本研修に特別参加した浅井教祥（龍谷大学）院生である。

Science and Philosophy in the Indian Buddhist Classics

Volume 1 The Physical World

Part 1 Overview and Methodology

日本語訳

概 要

本稿は、『仏教における科学と哲学の集成』（チベット語原題：*nang pa'i tshan rig dang lta grub kun btus*）の英訳版 *Science and Philosophy in the Indian Buddhist Classics* の第一巻、第一部の日本語訳である。本シリーズは、インド仏教の典籍における内容について、科学・哲学・宗教の三つの領域に区分することができるという見解に基づき、現代の読者に対して、あらゆるものの本質に関する仏教の科学的・哲学的思想について学ぶことができるよう、ダライ・ラマ十四世によって考案され、その監修のもとに編纂されたものである。

本書は英訳版全四巻の第一巻であり、科学に関する内容のうち、外界の物質的な世界に対するアプローチについて、チベット仏教哲学の体系に沿った説明が、インド仏教文献に基づいてまとめられている。本稿で訳出した箇所では、いわゆるアビダルマや聖典論、仏教論理学など、仏教における存在論や方法論といった内容から、チベット仏教論理学における具体的な問答法まで、多岐に渡る話題についての概要が述べられている。

凡 例

- ・専門的な仏教門用語の訳語について、なるべく平易な現代語を採用するようにし、いわゆる伝統的な漢訳語を（）で示した。また、人名や書名、仏教用語など、英訳版でサンクリット語やチベット語が記載されているもの、あるいはその明記が必要と思われる語についても（）で示した。
- ・脚注について、本稿では、英訳版の脚注を脚注番号をそのままに翻訳して付した。また、本文中の一次資料の引用については、日本語による翻訳研究や校訂テキストなどがある場合は、管見の限り、その資料情報を併せて明記した。

第一部 概要と方法論

科学はどのような意味か？

この本を目の前にして、現代の読者は、この特別な編集における経験的世界が示すものは、科学として正当に位置づけられるのだろうかと疑問を抱くかもしれない。今日、我々は科学というと、実験によって仮説を検証し、不確定なものを制御する独自の方法という観点から考えようとするが、これはごく最近のことである。本来の意味での「科学」とは、自然界とその行為を支配する法則や原理に関する知識のことを指す。この古典的な意味において、このような知識が他の形式と異なっているのは、経験的な観察に基づいていること、そして同じ探求方法に従う限り、その知識は他の人よっても導き出せるものでなければならぬという、相互主観的な性質であることである。

この定義に基づき、我々の経験的世界の事象に関する本シリーズの見解は、広義で科学的であると言える。古代インド仏教の思想家たちは、我々の物質的・精神的世界について主張するにとどまらず、生命を支配する自然法則を理解しようと努めた。例えば、物質的世界を構成する原子は何であるのか、マクロな世界が小さな単位の集合によってどのように形成されているのか、宇宙はどのように進化してきたのか、生命とは何であり、どのように誕生したのか、など、実在の構成要素に対する関心を持っていたのである。その証拠に、インド北部にある古代インド仏教のナーランダー僧院には、かつて天文学者のアーリヤバタ (Āryabhaṭa) が使用した天文台まであったことが考古学的に証明されている。しかし、西洋科学と同様に、自然界に対する仏教の探究もまた一様ではなく、様々な見解や主張、問答、改正によって特徴付けられている。

アビダルマの背景

仏教思想の根源が、前六世紀から五世紀の間にインドに現れた仏教の開祖である仏陀の教えにあるのは間違いないであろう。仏説とされる様々な経典のうち、実際に釈尊が約四十年間の布教活動の中で説いたものがどれなのかを断言するのは困難であるが、仏陀の教えが、苦が存在すること（苦諦）、苦の要因があること（集諦）、苦は止滅させ得ること（滅諦）、そのような止滅を導く道があること（道諦）の四つの真実（四聖諦）の枠組みの中で捉えられていることは、ほとんどの初期資料で一致している。仏陀の重要な教説は、多くの苦しみの原因は我々自身の心の中にあること、特に我に対する誤った見方に根差していること（我執）、我々の苦しみを緩和することができるのは、自身の心を変えることである、というものであった。「無我（anātman）」についての考察は、人の存在を構成する五つの集合（五蘊）という観点からの古典的な分析によって、仏陀と密接に関連するようになった。五蘊とは、いろ・かたち（色蘊）、感受作用（受蘊）、取像作用（想蘊）、意思作用（行蘊）、識別作用（識蘊）のことを指す。やがて、この五蘊の構造は、条件づけられた存在（有為法）世界全体を包含し、分析する高度な枠組みへと発展していった。

また、このような、仏陀の教説を整理し、包括的な世界観の構築する、より大きな哲学的意味を引き出すための体系的なアプローチが、前二世紀から一世紀にかけて始まったことを示す証拠がある。現代においては、この時期をアビダルマの黎明期と呼んでいる。アビダルマ（abhidharma）とは、「最高のダルマ（教え）」や「ダルマに向かうもの」という意味で、仏陀により与えられた教説であるスートラ（sūtra, 経）と対比される。スートラは、仏陀がインド亜大陸を遊行した際の説法を物語として記録したものであるのに対し、アビダルマは、文学的要素をほとんど含まず、スートラの中にある教義的表現を抽出し、それを包括的かつ体系的に構築した、より学術的な論書である。よって、スートラにおいて説話のようだったものが、アビダルマでは完全な思想体系となったのである。四世紀のインド仏教において有力な思想家であったヴァスバンドゥ（Vasubandhu, 世親）は、アビダルマを「無垢の智慧と、それに付随する諸法（*Abhidharmakośa*, Chap.1, k.2a）」と定義している。アビダルマとは、思想体系とそれに関連する文献として、諸存在をその普遍的、または特殊な特徴に従って識別、分析することを可能にし、仏陀による教説の真意を明らかにして、心の汚れを消し、悟りへの道を進むことを可能にする知識の体系なのである。後代になると、アビダルマ七論と呼ばれる文献がまとめられ、これらは『大毘婆沙論』（*Mahāvibhāṣā*）を構成する基礎となり、有力な部派であった説一切有部（*Sarvāstivāda*）が継承した立場を体系化した。また、説一切有部と平行して発展した上座部アビダルマは、別に独自のアビダルマ七論を聖典とした。

アビダルマ文献に特徴的なのは、分類学的な整理をする傾向があることにあり、論母（*mātrkā*）は、存在の根拠を共通の属性に基づいてまとめたものである。また、複雑な要素を明確にするために、論証的な説明もなされている。アビダルマ思想の中核には、法（*dharma*）と言われる「存在の要素」の概念がある。ここでの法という言葉の意味は、仏陀の教えを指すときに使われるダルマとは異なるものであり、それ自体が本質的な性質を

伴う存在の究極的な構成要素であり、世界は究極的な法によって構成されているとする考え方は、「ダルマ理論」と呼ばれるようになった。このように、アビダルマの目的は、我々が日常的に経験する複合的な対象を構成要素に還元的に分析することで、我々自身の存在や世界を、我々の愚昧な視点で見るのではなく、「実在の在り方」として知られるようになる。

遅くとも前二世紀までには、説一切有部において、あらゆる存在要素が次の五つの枠組みで分類されるようになった。

- (1) 物質を構成する要素（色法）
- (2) こころの本体（心法）
- (3) こころの本体に伴う心理的諸要因（心所法）
- (4) こころの本体に伴わない諸形成要因（心不相応行法）
- (5) 条件づけられていない存在（無為法）

最初の四つは、因果的な相互作用を特徴とし、生起と断滅を必要とするので、有為法に分類される。これに対して、五つ目の無為法は、発生や止滅を伴わない法である。さらに、説一切有部のアビダルマでは、還元的な分析を通して七十五項目の法を列挙し、それぞれ、色法（十一項目）、心法（一項目）、心所法（四十六項目）、心不相応行法（十四項目）、無為法（三項目）に分類している。

アビダルマの分類法の詳細やダルマ理論の詳細については、仏教の他学派から異論が唱えられるようになるが、諸存在を有為と無為に区分し、有為を物質的、精神的、その他の条件要素（時間や行為など）に分類する基本的な考え方は、仏教思想における批判的探究の基礎規範を築いたのである。しかしながら、三世紀頃に経量部（*Sauntrātika*）の影響力が拡大し、さらに五世紀にディグナーガ（*Dignāga*, 陳那）によって仏教論理学が確立されて以降、存在論から認識論への転換が図られるようになった。この認識論への転換により、「実在とは何か」、「存在を定義するものは何か」、「普遍は存在するのか」といった問いが生まれ、インド仏教において議論が展開されるようになった。

初期仏典における存在の分類

第一部ではまず、仏教文献において自然界を考察する際に、あらゆる存在に対して様々な分類体系を用いていることを概説する。五蘊の枠組みは、元来、人の性質を分析するための基礎であったが、後に有為法を分類するための包括的な体系として確立したことは、すでに述べた通りである。しかし、仏陀の教説には、さらに十二処 (āyatana) と十八界 (dhātu) という二つの分類体系が広く存在している。処とは、文字通り「発生の領域」を意味し、この十二処を通じて、識別作用や様々な心理的要因が生起し、増殖していく。十二処は、視覚器官 (眼処)、聴覚器官 (耳処)、嗅覚器官 (鼻処)、味覚器官 (舌処)、触覚器官 (身処)、こころ (意処)、という六つの感覚器官 (六内処) と、それに対応する、いろ・かたち (色処)、音声 (声処)、香り (香処)、味 (味処)、触覚対象 (触処)、こころの対象 (法処) という六つの認識対象 (六外処) で構成されている。この十二処の分類は、こころの発生の過程に必要なすべての構成要素を包括している。また、「法処」というカテゴリーには、無為法まで包含され、あらゆる存在するものが包含される。

十八界の分類の中で、意処というカテゴリーはさらに、視覚 (眼識界)、聴覚 (耳識界)、嗅覚 (鼻識界)、味覚 (舌識界)、触覚 (身識界)、知覚 (意識界) という六種の意識に区別される。このモデルでは、六つの感覚器官 (六根) とそれに対応する対象 (六境)、そして感官とその対象の組み合わせからなる六種の意識 (六識) という、三つの組み合わせからなる。この体系では、十八の項目を界と称しているが、これはサンスクリット語の dhātu の訳語で、その意味は仏教においても広義である。ヴァスバンドゥは、この語を「種」「種類」「起源」と定義し、十八界のそれぞれが、それぞれの種類の連続体の起源であることを説明する。仏陀の教説における元の文脈では、十八界は、人を感覚器官、体性、意識の観点から分析することで、無我の教えをより深く探求するための実用的なリストであったと考えられる。後に、これらの分類体系は、実在を考察する主要な方法として知られている「ダルマの識別」(dharmapracaya, 簡拓法) に欠かせないものとなった。

本編の構成と出典

『インド仏教における科学と哲学』シリーズの最初の二巻は、以下の五つのテーマを中心に構成されている。

- (1) 世界の本質、知ることのできる対象
- (2) 心の実在、認識する主体
- (3) 心の対象への関わり方
- (4) 心が対象に関わる手段
- (5) 知る人の本質

第一巻では、最初のテーマを最も広範に扱い、残りの四つのテーマは第二巻で扱う。この五つのテーマは、インド仏教の哲学的思考とそれを継承するチベットの伝統に深い影響を与えたディグナーガと、その主要な追従者である七世紀のダルマキールティ (Dharmakīrti, 法称) の認識論に関する著作からインスピレーションを得ている。

本書の編集者が参照するインド仏教の古典籍は、膨大な数の文献からなり、カンギュル (bka' 'gyur, 甘珠爾) とテンギュル (bstan 'gyur, 丹珠爾) と呼ばれるチベット語訳の二つの大蔵経にまとめられている。カンギュルは「翻訳された聖なる言葉」、テンギュルは「翻訳された論説」として知られ、前者は経典、後者は三千以上の論書を含んでいる。これらの聖典は、七世紀以降、幾度も翻訳がなされ、インドから仏教が消滅した後の十四世紀には、現在のような大蔵経が完成した。本シリーズでは、五つのテーマごとに、チベット人の編者が、インド仏教のどの文献を参考にしたかを述べている。しかし、このような使い方は、その古典籍の著者が、自身の著書を狭い領域でしか通用しないと考えているわけでは決してない。これらの著作の多くは、困難な感情の制御から、仏陀の最高の智慧の獲得までに不可欠な、あらゆる知識を提示するという包括的な目的で著されたからである。

インド仏教における四大学派

このシリーズを読む際に念頭に置かないといけないことは、インド仏教における四大学派についてである。チベット人の編者が、インド仏教の思想家たちの見解を、彼らが属すると思われる学派の確立された立場ではなく、個々の見解を提示しようと努めたように、インド人の思想家の理解が、各自の学派の立場に関する通説的な見解と、密接に関わっていることには変わりはないのである。このように、仏教哲学を四つの主要な学派の視点に分化させ、その見解を批判的に比較することは、遅くとも六世紀にはインドで始まっており、チベットの伝統においても大きな焦点となった。この四大学派とは、毘婆娑師 (Vaibhāṣika)、経量部、唯識 (唯心) 学派 (Cittamātra)、中観学派 (Madhyamaka) である。一つ目の学派について、広義には、説一切有部や上座部 (Teravāda) など、あらゆる部派が含まれる。アビダルマと対照的に、「経典を支持する (量とする) 者」を意味する経量部は、実在の単項分類を伴うダルマ理論を否定し、より単純で認識論的な存在論を提唱している。ヴァスバンドゥの『俱舍論』(Abhidharmakośa) の自註に示された中心的な立場や、ディグナーガやダルマキールティの認識論的著作に示された見解の大部分は、この学派の立場として知られる。瑜伽行派 (Yogācāra) とも呼ばれる唯識学派の重要人物は、四世紀のアサンガ (Asaṅga, 無着) とその弟のヴァスバンドゥであり、また、ディグナーガやダルマキールティの著作におけるより発展した立場は、外界の物質的実在を否定する唯識学派を代表するものと理解される。最後の学派である中観学派は、有力な仏教思想家であるナーガールジュナ (Nāgārjuna, 龍樹) によって創始された。この学派の中心的な思想は空の概念であり、縁起の世界の外には何も存在しない、つまり独立して存在するものや本質を持つものはないと主張する根本的な相対主義的立場である。現代的に言えば、形而上学的に完全な現実の記述を求めること自体に疑問を呈する非還元主義・反理性主義の学派である。この学派の主要人物には、アーリヤデーヴァ (Āryadeva, 提婆)、バーヴィヴェーカ (Bhāviveka, 清弁)、ブッダパーリタ (Buddhapālita, 仏護)、チャンドラキールティ (Chandrakīrti, 月称)、シャーンティデーヴァ (Śāntideva, 寂天) などがある。

仏教の「科学的」探求の根底にある原理と方法

第一部の重要なテーマは、現代で言われるところの「方法論的問題」に関わるものである。これには、(1) 自然界における規律原理や法則に関する基本的な哲学的見解、(2) 知識の根拠とその範囲に関する認識論的理論、(3) 世界に関する知識を得るために不可欠な論理的原理（同一律、矛盾律など）が含まれる。

パーリ語文献には見られないが、サンスクリット語によるいくつかの初期仏典には、「四つの拠りどころ（四依）」の原理を採用するよう勧めているものがある。それは、人ではなく教えに、言葉ではなく意味に、暫定的な意味ではなく確定的な意味に、通常意識ではなく叡智に頼るというものである。同様に、初期仏典では、仏陀が弟子たちに、仏への信仰と畏敬の念から、仏の言葉を文字通りに受け取るのではなく、金細工師が金を焼いて、切って、磨いて試すように、自分自身で検証し、その妥当性を分析するよう勧めている。歴史的に見ても、仏教徒にとって仏陀の言葉には大きな重みがあったが、科学的、哲学的な考えを持つ学派にとっては、知識の根拠を評価するための階層が生まれ、直接的な知覚が最も信頼でき、次に推論、そして最後に聖典の証言が、通常認識では立ち入れない主題や事実を扱う場合に、極めて狭い範囲でのみ有効であるとされるようになった。

このように、推論よりも直接的な経験を、聖典よりも論理を優先させることは、知識の対象である世界が、三種類の異なる事実によって特徴づけられるという存在論的な帰結をもたらす。第一に、我々の感覚によって直接的に知覚できる**明らかな事実**の世界があり、第二に、我々の感覚によって知覚できないが、それらの隠された領域と論理的に関連づけられた客観的事実に基づいて推論することができる、**やや不明瞭な事実**がある。最後に、**極めて不明瞭な事実**、例えば業（karma）の法則の微妙な働きの具体的な詳細など、普通の人にとっては聖典に頼ることでしか知り得ない事実がある。

さて、仏教の探究において論理的理由が重要な役割を果たすのは、第二の領域であるやや不明瞭な事実に関する知識と、第一の領域である明らかな事実の解釈である。古代ギリシャの思想や、その流れを汲む現代の西洋科学と同様、仏教思想における論理的理由は、基本的な一連の論理的原理を認めることが前提となっている。その中には、同一律、矛盾律、排中律や、普遍とその実体、原因と結果など、論理的相互関係に付随する法則も含まれる。論理的理由は、これらの論理的原理を前提とすることで、観察されるものを、観察されないが論理的に関連するものと結びつけ、それによって有効な推論的知識を得ることが可能となる。論理的理由に由来する知識であっても、その妥当性は観察された事実に対する経験的な知識に辿りつく検証可能性の過程に依存していることがわかる。

このセクションで確認された、もう一つの重要な方法論に関する原理は、「四つの原理」（四種道理）と呼ばれるものである。これは、本性の原理、作用の原理、依存性の原理、証明の原理である。ここでの考え方は、証拠や証明の法則は、先の三つの原理に基づいてのみ成立することができるというものである。「aであるならばbである」という論理的な推論ができるのは、両者の間に依存性の原理を裏付ける因果関係があるからである。そして、このような因果関係が成り立つのは、両者の関係が個々に異なる特徴を持ち、それが

特定の作用を持っているからである。この一連の流れは、物事が実際にそうであるという事実、すなわち、本性の原理に基づいている。つまり、分析の道筋が本性の原理に到達したとき、探究の過程は完了する。なぜなら、ここで説明され得るのは、ただ「そういうものである」と、これのみであるからである。

仏教について、少なくとも以上のような特徴から、経験主義の一形態と見なすことができるのか、また先に述べたように、この編纂にあるものが「科学」として正当に位置づけられるか、という疑問がある。筆者自身の感覚では、最初の質問に対する答えは、文脈にもよるが、「はい」でもあり「いいえ」でもあるように思われる。というのも、仏教における立場は、少なくともディグナーガとダルマキールティの認識論によって確立されているが、特定の領域に関して、つまり、経験的に明らかな事実である第一の分類と、経験的には不明瞭であっても論理的に推論できる事実である第二の分類に関する知識については、ある種の経験主義として広く見ることができるのである。先に述べたように、この二つの領域では、我々の知識の究極の拠り所は、直接的な知覚であることに変わりはない。もし、我々の知識によって、すべての事実を知っていると言うのであれば、経験主義の一形態と見なすことができるのかという問いに対する答えは「いいえ」である。明らかに、仏教では、すべての事実が我々の感覚によって、あるいは我々の感覚から派生する知識によって理解できるという見解に同意していないからである。

では、この三つの事実の領域の境界はどの程度厳密なのであろうか。これらは実在の客観的な特徴なのか、それとも、それを観察する心によるものなのか。言い換えれば、これらの区別は、仏陀の智慧となると崩壊するのであろうか。

これは、仏教と科学との接点を規定する重要な問題である。しかし、物質的な世界と精神的な世界の両方において、仏教における方法は、科学と同様に、すべての理論は先験的な推論や聖典の記述に基づいて判断されるのではなく、少なくとも経験的な観察に基づいて分析されるべきであることを、前提としていることは明らかであるように思われる。聖典の中における対立する見解や、特定の立場を支持、または批判する多数の議論から判断すると、仏教論理学者たちの間では、自身の命題の真実性は、経験的証拠、内部一貫性、論理的理由という基準で判断されるべきであるという共通の合意があるように思われる。ドライ・ラマ猊下が「もし科学が生まれ変わらないことを証明したら、仏教徒はその結論を受け入れなければならない」という発言をした背景には、こうした方法論的責任があるのである。

第一部の最後には、論理学の基本原則を問答法に応用した体系的なアプローチとして知られる、チベット仏教における『問答集』 (*bsdus grva*, 発音は *dūra*) による推論法を簡単に紹介する。この『問答集』 (「集められた〔問答〕」とは、論理学や認識論に関するインドの偉大な仏教古典籍から抽出したことを意味する) は、チベット僧院教育における第一段階であり、学僧が偉大な古典哲学の批判的研究に従事できるように、問答や推論の技術を具えさせるためのものである。本書の第一部で紹介する理由も、実在に対する我々の

見解を提示し、さらに洗練させる上で、推論が果たす役割について、読者の理解を助けるためである。

英語による参考書

アビダルマ思想に関する平易な入門書としては、Jan Westerhoff, "Abhidharma Philosophy," in *The Oxford Handbook of World Philosophy*, edited by William Edelglass and Jay L. Garfield (New York: Oxford University Press, 2011) がある。

アビダルマの歴史に関する概説書としては、Collet Cox, *Disputed Dharmas: Early Buddhist Theories of Existence* (Tokyo: The International Institute of Buddhist Studies, 1995) の第一部を参照。

実在の本質を探究する仏教における方法論と、科学的方法との類似性に関する議論については、Dalai Lama, *The Universe in a Single Atom* (New York: Morgan Road Books, 2005) の第二章を参照。

仏教と科学の関係についての有益な論考集に、Alan Wallace, ed., *Buddhism and Science: Breaking New Ground* (New York: Columbia University Press, 2003) がある。

『問答集』でまとめられるチベットの問答と推論の体系について、詳細に、かつ平易に紹介したものとして、Daniel Perdue, *The Course in Buddhist Reasoning and Debate* (Boston: Snow Lion Publications, 2014) がある。

第一章 法の分類体系

インド仏教における文献では、実在の問題を提示するとき、多くの分類体系に依拠している。例えば、説一切有部のアビダルマ七論⁷に属する『発智論』 (*Jñānaprasthāna*)、および、その注釈書である『大毘婆沙論』では、あらゆる存在 (dharma, 法) を、(1) 集合 (skandha, 蘊)、(2) 要素 (dhātu, 界)、(3) 領域 (āyatana, 処) の三つの体系に分類することが行われている (三科分類)。

まず、すべての条件付けられた存在 (有為法) は、①いろ・かたち (色蘊)、②感受作用 (受蘊)、③取像作用 (想蘊)、④意思作用 (行蘊)、⑤識別作用 (識蘊) の五蘊によって体系的に示される。また、外的・内的存在を、認識対象 (境)、感覚器官 (根)、識別作用 (識) によって分類すると、存在するものは十八界、または十二処によって分類される。十八界は、①いろ・かたち (色界=色境)、②音声 (声界=声境)、③香り (香界=香境)、④味 (味界=味境)、⑤触覚対象 (触界=触境)、⑥こころの対象 (法界=法境) という六つの認識対象 (六境) と、⑦視覚器官 (眼界=眼根)、⑧聴覚器官 (耳界=耳根)、⑨嗅覚器官 (鼻界=鼻根)、⑩味覚器官 (舌界=舌根)、⑪触覚器官 (身界=身根)、⑫こころ (意界=意根)、という識別作用の所依となる六つの感覚器官 (六根)、そして、⑬視覚 (眼識界)、⑭聴覚 (耳識界)、⑮嗅覚 (鼻識界)、⑯味覚 (舌識界)、⑰触覚 (身識界)、⑱知覚 (意識界) という、それぞれ六根を所依とし、六境を対象とする六つの認識主体 (六識) からなる。以上の分類体系を十二処に適用すると、あらゆる存在は、①色処 (=色界)、②声処 (=声界)、③香処 (=香界)、④味処 (=味界)、⑤触処 (=触界)、⑥法処 (=法界) の六つの認識対象 (六外処) と、⑦眼処 (=眼界)、⑧耳処 (=耳界)、⑨鼻処 (=鼻界)、⑩舌処 (=舌界)、⑪身処 (=身界)、⑫意処 (=意界) の六つの感覚器官 (六内処) という、十二処に分類される。以上の分類体系において、常住不変の存在 (無為法) は、十八界に挙げられる法界と、十二処に挙げられる法処⁸に含まれる。

また、ヴァスバンドウの『俱舍論』などの毘婆沙師 (説一切有部) の著作においては、実在を、(1) 物質を構成する要素 (色法)、(2) こころの本体 (心法)、(3) こころの本体に伴う心理的諸要因 (心所法)、(4) こころの本体に伴わない諸形成要因 (心不相応行法)、(5) 条件づけられていない存在 (無為法) という、実在の基本的な五つのカテゴリー (五位) の枠組みが提示されている。

⁷ 説一切有部におけるアビダルマ七論とは、カーティヤーヤニープトラ (Kātyāyanīputra) による『発智論』 (*Jñānaprasthāna*)、ヴァスミトラ (Vasumitra) による『品類足論』 (*Prakaranapāda*)、デーヴァシャルマン (Devasarmā) による『識身足論』 (*Vijñānakāya*)、シャーリプトラ (Śāriputra) による『法蘊足論』 (*Dharmaskandha*)、マウドガリヤーナ (Maudgalyāyana) による『施設論』 (*Prajñaptisāstra*)、マハーカウシティラ (Mahākoṣṭha) による『集異門足論』 (*Samgītīpariyāya*)、プールナ (Pūrṇa) による『界身足論』 (*Dhātukāya*) である。

⁸ こころの対象は、法界 (chos kyi khams, dharmadhātu) と呼ばれ、法処 (chos kyi skye mched, dharmāyatana) とも呼ばれる。

この分類によれば、物質などの五感の対象や眼などの五感の能力といった、外的・内的すべての物質的存在は**色法**に分類される。意識の内的世界を構成する存在は、**心法**と**心所法**の二つに分類される。有為法の三つの属性、すなわち、(1) 発生、(2) 持続、(3) 消滅、また、過去・現在・未来の三つの時間など、物質にも意識にも属さない有為法は、**心不相応行法**に分類される。最後に、原因と条件によって生じない存在は、**無為法**に分類される。以上のように、知ることができるすべての対象は、五位によって体系的に分類される。

しかし、インド仏教における認識論の文献では、実在の提示について、(1) 知識の対象、(2) 知る心、(3) 心が対象に関与する方法、という三つの話題で組み立てられている。これに対して、瑜伽行唯識学派の文献において、実在は、(1) 依他起性、(2) 円成実性、(3) 遍計所執性という三つの自性の理論によって示される(三性説)⁹。中観学派の文献では、存在するものは、①二つの真理(二諦)¹⁰からなる基礎(gzhi)、②方便と智慧の両方を含む道(lam)¹¹、③仏陀の真理としての身体(法身)と形態としての身体(色身)という果('bras bu)¹²、という観点から提示される。タントラの文献では、(1) **地(基礎)**、すなわち実在の性質、(2) **道**を進むための段階、(3) **果**がどのように実現されるか、という観点で実在の提示が配置されている。このように、インド仏教における文献では、実在の本質を体系的に示すために、様々な形式が採用されている。

本シリーズの一、二巻では、実在に関する提示を、以下の五つの主題で構成している。

1. 知ることのできる対象の提示
2. 認識する心の提示
3. 心の対象への関わり方
4. 心が対象を把握する手段
5. 対象を把握する主体である人の提示

「インドには膨大な数の仏教典籍があるが、このシリーズの主な典拠は何か」と問われるかもしれない。本書では、一般的な物質的存在、特に四大元素とその派生形態、および物質的実体を構成する精妙で粗雑な粒子(極微)の提示について、大部分がアビダルマの

⁹ 三性説(trisvabhāva)は、瑜伽行唯識学派の哲学的立場であり、あらゆる存在は三つの本質(svabhāva)に含まれると主張する。(1) 依他起性(paratantra)は、すべての無常な実体を指し、(2) 円成実性(pariniṣpanna)は、空性または不二性を指し、(3) 遍計所執性(parikalpita)は、空性以外のすべての恒常的な事象を指す。Stephen Anacker, *Seven Works of Vasubandhu: The Buddhist Psychological Doctor*, Delhi: Motilal Banarsidass Publishers, 2005, 291を参照。より詳細な解説は、Jay Garfield, "Vasubandhu's Treatise on the Three Natures: A Translation and Commentary." *Asian Philosophy* 7.2, 1997, 133-54を参照。

¹⁰ 勝義諦(paramārthasatya)とは、無我や空性として知られる実在の究極の本性を指し、世俗諦(samṅtisatya)とは、通常感覚対象など、空性以外のすべての存在する事象を指す。

¹¹ 方便(upāya)とは、離俗と慈悲のことで、瞑想の動機となるものであり、智慧(prajñā)とは、空性または無我という言葉で表される、実在の性質を見極めることのできる意識のことである。

¹² 色身とは、仏陀の肉体を指し、法身とは、仏陀の心とその心の空性を指す。

文献の伝統に基づいている。アサンガの『阿毘達磨集論』 (*Abhidharmasamuccaya*) とその注釈書などの菩薩乗 (大乘) アビダルマ系の文献、アビダルマ七論や『大毘婆沙論』、これらの著作を解説したヴァスバンドゥの『俱舍論』とその関連著作などの声聞乗 (小乗) アビダルマ系の文献、以上を本書の資料としている¹³。また、バーヴィヴェーカの『思摂炎』 (*Tarkajvālā*) とその注釈書の伝統も参照した。具体的には、不可分の粒子が存在するか否かを分析する部分において、ナーガールジュナ、アーリヤデーヴァ、チャンドラキールティなどが提示した、無部分の実体の存在を否定する論理的議論を主に選択した。また、ヴァスバンドゥの『唯識二十論』 (*Vimśatikā*) から引用している。外界 (器世間) とその住人 (衆生世間) の形成と破壊、胎内の胎児の発達などについては、『仏説入胎蔵会』 (*Nandagarbhāvakraṇāntinirdeśa-sūtra*)、菩薩乗・声聞乗のアビダルマ、『時輪タントラ』 (*Kālacakra-tantra*)、伝統医学典籍などに、おおよそ依拠している。精妙な身体の脈管、風、粒滴に関する情報は、「無上瑜伽タントラ」の文献や医学書から得ており、脳に関する記述も、伝統医学典籍に基づいている。

主観的な心については、アサンガの『瑜伽師地論』 (*Yogācārabhūmi*) とそれに関連する瑜伽行派文献、ヴァスバンドゥの『俱舍論』とその自註、さらにディグナーガやダルマキールティの著作などの仏教論理学の伝統の文献と、後代におけるそれらの注釈書を主に利用した。心的な要因については、菩薩乗・声聞乗のアビダルマ文献を編集したものである。心の精妙さについては、高次元と低次元の存在 (の精神状態の精妙さ) に依存する「粗雑な」心と「精妙な」心の概念という意味で、主に菩薩乗・声聞乗のアビダルマ系の文献と瑜伽行派の著作に依拠している。「無上瑜伽タントラ」体系で述べられている心の精妙さの段階、風と心の解消の段階、死の段階などについては、主に『秘密集会タントラ』 (*Guhyasamāja-tantra*) のテキスト・コーパスと、『時輪タントラ』体系に属する一連の文献から引用している。

精神が対象に働きかける方法については、仏教の認識論的伝統の文献を主要な資料とし、アサンガとその信奉者による瑜伽行派文献も活用した。また、形式的推論の応用という意味で、精神が対象に働きかける方法については、仏教経典やアサンガの『声聞地』 (*Śrāvakabhūmi*) などの仏教認識論の著作をもとに説明した。また、心の修練方法に関する要点については、『解深密経』 (*Samdhinirmocana-sūtra*)、菩薩乗・声聞乗のアビダルマ、瑜伽行派の著作に依拠している。特に、活用した具体的な文献として、シャーンティデーヴァの『入菩提行論』 (*Bodhicāryāvātara*) と『学処集成』 (*Śikṣāsamuccaya*)、ダルマキールティの『量評釈』 (*Pramāṇavārttika*)、カマラシーラ (*Kamalaśīla*, 蓮華戒) の『修習次第』 (*Bhāvanākrama*)、以上の文献を活用した。最後に、対象を把握する人の提示については、中観学派の論書などから引用した。

¹³ 菩薩乗アビダルマの基本文献であるアサンガの『阿毘達磨集論』と、声聞乗アビダルマの基本文献であるヴァスバンドゥの『俱舍論』には、前・後伝期のチベット人学僧が多くの注釈書を書き、両書の体系の解説と研究は、チベット仏教初期から広く行われていた。

第二章 探究の方法

批判的分析と「四つの拠りどころ（四依）」

初期のインド仏教の思想家たち、特にナーランダー僧院¹⁴の思想家たちが、五蘊、十二処、十八界など、実在について様々なアプローチで説明したとき、彼らは經典に書かれていることをそのまま受け入れたのか、それとも主として論理的推論に基づいて説明したのか。

仏教における実在の分析に携わる方法は、仏陀自身が經典において次のように述べている。

僧侶や学者たちよ、あなたが金を焼いて、切って、磨いて調べるように、私の言葉もよく吟味しなさい。ただ尊敬の念で受け入れてはならない¹⁵。

このように、仏陀は弟子たちに、經典の意味を調べるときは、熟練した金細工師が金を焼いて、切って、磨いて試すように、関連する話題を厳密に分析するようにと勧め、そして、その言葉に確信を得たときにのみ、經典の記述に確信を持つべきであると述べている。そして、批判的な分析なしに、ただ自分の師が言ったからというだけで、何かを確信するのは不適切であるから、この経文は、実在の本質を分析するとき、主要なのは經典ではなく、推論から得られた証拠であることを示している。

一般的な仏典、特にナーランダー僧院の学僧による論書では、特定の問題を分析する場合、論理的な推論や經典に比べ、直接的な経験がより重要視される。また、実在の本質を探求するときに經典を唯一の権威とするならば、その經典もまた別の經典によって検証される必要がある。この第二の經典は、今度は別の經典の支持を必要とし、その結果、無限

¹⁴ ナーランダー僧院 (Nālandā Mahāvihāra) は、インド・ビハール州の古都ラージャグリハ (Rājagṛha, 王舎城) の近くに設立され、仏弟子のなかで智慧第一とされるシャーリプトラの出生地と伝えられている。ターラナータによれば、アショーカ王はこの地に以前のチャイティヤ (祠堂) に代わる大寺院を建てたが、その後、グプタ朝やパーラ朝の庇護のもと、六世紀から十二世紀にかけて大学として栄え、九階建ての図書館を含む広大な僧院建築を誇った。最盛期には千五百人の教職員と一万人以上の学生が在籍し、その多くは外国人であった。最も著名な学僧に、ナーガールジュナ、アーリヤデーヴァ、ブッダパーリタ、パーヴィヴェーカ、アサンガ、ヴァスバンドゥ、ディグナーガ、ダルマキールティ、シャーンティデーヴァ、チャンドラキールティ、カマラシーラなどがいる。Buswell, Robert, E. Jr., and Donald S. Lopez, Jr. *The Princeton Dictionary of Buddhism*. Princeton, NJ: Princeton University Press, 2014, pp.565-56 を参照。

¹⁵ この引用は、チベット大蔵經の經典部 (bka' 'gyur) において見つけられないが、似通った表現を持つ記述が『大力タントラ』(Mahābala-tantra) において、以下のようにみられる。

焼かれ、切られ、磨かれる金のように、私の言葉を正しく吟味し、確信を持って実践しなさい。学問のある人の言葉を鵜呑みにしてはならない。

(Mahābala-tantra, Chap.1. Toh No.391, f.216. Pd Vol.79, p.627)

また、これと似た一節が、パーリ正典の『アングッタラ・ニカーヤ』(Aṅguttara Nikāya, 増支部經典) の『カーラーマ・スッタ』(Kālāma Sutta) また『ケーサムutti・スッタ』(Kesamutti Sutta) にある。

の遡及が生じることになる。このように、仏陀のこの言葉は、經典の検証は最終的には無謬の論理に拠らなければならず、その無謬の論理は、今度は正しい経験に基礎を置かなければならないことを示している。このようなアプローチが、仏陀によって賞賛されている。

さらに、著名なナーランダー諸師の著書を調べると、読者は最初から信仰や確信を通してではなく、テキストの主題に関わる批判的な探求に基づいて、その著作に接近すべきであることがわかる。積極的な疑い（つまり、事実に資する疑い¹⁶）が生じたとき、これはその論書の主題に取り組む段階である。また、これらの思想家は、主題が**解説の五つの要素**で示されるならば、読者の心にテキストの内容を分かりやすくするのに役立つと述べている。

解説の五つの要素とは、

1. どのような論書でも、その著述には**目的**があるはずである。
2. テキストの主題の要点が読者の心に容易に現れるように、その論書の本篇の**要約提示**がなければならない。
3. 次に、テキストの解説を構成する**語義**がなければならない。
4. 難解な点、疑問点を批判的に分析する**論難と答釈**があること。
5. テキストの前後部分の関連を確立する**関係標識**も必要である。

このように、どのような論書においても、説明の五つの要素すべてを重要視する習慣が生まれたのである。例えば、ヴァスバンドゥの『釈軌論』(Vākyāyukti) には、次のように書かれている。

經典の意味を詳しく説明する人は、**目的、要約、語義、関係、および論難の答釈**という観点から説明すべきである¹⁷。

実在の本質を批判的に探究する場合、四つの依りどころ（四依）がその人に要求される最低条件である。それゆえ、興味を持った人がある論書を調べるとき、著者がいかに有名であるか、またその言葉がいかに雄弁であるかを気にかけるべきではありません。その代わり、その論書の構成に注目し、それが適切かどうかを検討しなければならない。内容についても、文字通りの意味ではなく、そのテキストの決定的な、あるいは究極の意味に注目

¹⁶ 仏典では、しばしば次の三つの疑いの種類を挙げる。(1)「心はおそらく恒常である」という文を反映した疑いなど、事実に向かわない疑い (don mi 'gyur gyi the tshom, 非理猶豫) ; (2)「心は恒常でも無常でも等しくありうる」という文を反映した疑いなど、均等な疑い (cha mnyams pa'i the tshom, 等分猶豫) ; (3)「心はおそらく無常である」という文を反映した疑いなど、事実に向かう疑い (don 'gyur gyi the tshom, 合理猶豫) である。

¹⁷ Vākyāyukti, Chap.1. Toh No.4061, f.30b3. Pd Vol.77, p.85. / Cf. 本庄良文『釈軌論』第一章(上): 世親の經典解釈法『香川孝雄博士古稀記念論集 佛教学浄土学研究』永田文昌堂, p.112.

すべきである。そして、手近な（通常の）心だけを使った研究や熟考によって、テキストの意味を理解することに満足してはならない。そうではなく、その意味を深く理解するために、批判的考察と瞑想を組み合わせなければならない。このようなアプローチは、古典的な仏典では、**四依の原理** (rton pa gzhi'i nram gzhaḡ) と呼ばれている。例えば、『郁伽長者所問經』 (*Ugraparipṛcchā-sūtra*) では、次のように述べられている。

意味に依って言葉には依らず、超越的な叡智に依って通常の意識には依らず、教えに依って人には依らず、確定的な意味をもつ經典に依って暫定的な意味をもつ經典には依らない¹⁸。

「依る」とは、「確信する」という意味であると理解すべきである。依るべき四つのは、教え、意味、確定的な意味、そして超越的な叡智である。頼るべきでないものは、人、言葉、暫定的な意味、そして通常の意識の四つである。

最初の四つに依り、後の四つに依らない方法は、次のとおりです。「教えに依って人には依らない」(依法不依人) とは、批判的な分析をせずに、単にその人の名声だけで教えを受け入れたり、否定してはならないということである。その代わりに、教えを分析した上で、「これはよく教えられているので受け入れよう」「これはよく教えられていないので拒否しよう」と答えなければならないのである。

「意味に依って言葉には依らない」(依義不依語) というのは、言明の伝え方に注目せず、意味そのものに注目し、その意味を明確に理解することに努めるということである。それに対して、もしその言明に欠陥があれば、たとえその伝え方が巧妙であったとしても、それは拒否されなければならない。

「確定的な意味（をもつ經典）に依って暫定的な意味（をもつ經典）には依らない」(依了義經不依未了義經) というのは、論理的な推論によって文字通りの意味が損なわれるような仏陀の言葉は、信者を助けるために与えられた教えであると認識することである。そのような教えは、仏陀の最終的な意図を表しているわけではないが、特定の目的のために他の人々のために教えられたものである。これに対して、論理的な推論によって文字通りの意味が損なわれることのない教え、つまり仏陀の最終的な意図を示す、実在の究極的な性質を表す教えは、その意味が確定的であるとして信頼すべきものなのである。

「超越的な叡智に依って通常の意識には依らない」(依智不依識) というのは、確定的な意味を求めるときに、眼識のような通常人の感覚的な認識に信頼を置いてはならず、概念知に現れているもの、実在の究極の性質に関して間違っている認識を信頼してもいけないということである。そうではなく、物事をありのままに知る至高なる存在の非概念的超越的な叡智に対する、もしくはその超越的な叡智を生じさせる真実を理解する理性的認識に対する、確信を起こすべきなのである。あるいは、四依の原則は、確定的な意味を考えると

¹⁸ *Ugraparipṛcchā-sūtra*, Chap.19. Toh No.63, f.279a4. Pd Vol.42, p.831. / Cf. 長尾雅人, 櫻部健『大乘仏典 9 宝積部經典』中央公論新社, 2003, p.300.

きに、二元的な外観を負わされている通常の意識によって知られるものを第一義とすべきではない、ということ述べている。むしろ、あらゆる形の二元論が終息した均衡せる心が認識する真理を信頼すべきである。これらの点については、アサンガの『菩薩地』(Bodhisattvabhūmi) で以下のように説明されている。

菩薩¹⁹は、何が欠陥のある²⁰、つまり黒い教えで、何が偉大な、つまり純粋な教えであるかを正しく完全に理解し、これをよく理解した上で、論理的な推論に依る。彼は、「この真理は、長老、学識ある人、如来²¹、僧伽によって説かれたものである」という記述に基づいて、その人に依ることはないのである。このように、論理的推論に依り人に依らなければ、真実 (tattva) から外れることはなく、また、他の要因に左右されることもない²²。

「欠陥のある教えを提示する」とは、苦しみの原因のみを促進する論書を指し、「偉大な教えを提示する」とは、苦しみを取り除くのに役立つ解毒剤(対治)を養成する方法を促進する論書を指す。

意味に依って言葉には依らないということに関して、『菩薩地』では次のように述べている。

菩薩が教えを聞くのは、意味を求めるからであって、よくできた言葉を欲するからではない。だから、意味に依る菩薩は、たとえ日常的な共通語で教示がなされたとしても、敬意をもって耳を傾ける²³。

確定的な意味(をもつ経典)に依って暫定的な意味(をもつ経典)には依らないということについては、同じく『菩薩地』に次のように述べられている。

如来に対する信仰と喜びを大切にし、その言葉を確実に喜ぶ菩薩は、如来の確定的な(意味をもつ)経典に依り暫定的な意味の経典には依らないであろう。なぜ

¹⁹ 菩薩 (bodhisattva) とは、文字通り「悟り」(bodhi, 菩提) を目指す「存在」(sattva, 薩埵) であり、すべての衆生を悟りの境地に到達させるために、最高の悟りを得ようとする者を指す。

²⁰ 不完全な教え (kālapadeśa) とは、仏典にない教えで、正典としての権威を欠くとみなされるものである。

²¹ 如来 (tathāgata, de bzhin gshegs pa) とは、文字通りには、「実在 (tathā) に従って進む者 (gata)」であり、無我の本性、または空性の直接の認識を自らの内に継続的に維持する、覚醒した、または悟りを開いた存在を指す。

²² Bodhisattvabhūmi, Chap.17. Toh No.4037, f.136a7-b1. Pd Vol.73, p.859. Engle, Artemus. *The Bodhisattva Path to Unsurpassed Enlightenment: A Complete Translation of the Bodhisattvabhūmi*. Boulder, CO: Snow Lion Publications, 2016, Section 1.17.6 を参照。 / Cf. 荻原雲来『梵文菩薩地経(覆刻版)』山喜房佛書林, 1971, p.257, l.2-8.

²³ Bodhisattvabhūmi, Chap.17. Toh No.4037, f.136a6-7. Pd Vol.73, p.859. Ibid. Section 1.17.6 を参照。 / Cf. Ibid. p.256, l.23-p.257, l.1.

なら、もし如来の確定的な意味の経典に依れば、教えがもつ教化能力を奪われることはないからである。暫定的な意味の経典は、述べている事実が多様であるため、確実性に欠け、疑いを生じさせる。もし菩薩が確定的な意味の経典について確実性を欠くならば、彼は教えがもつ教化能力を奪われることになる²⁴。

超越的な叡智に依って通常の意識には依らないことについては、『菩薩地』に次のように述べられている。

菩薩は、研究と批判的考察から得られた教えとその意味についての単なる通常の認識ではなく、超越的な叡智である認識を心の本質と見なす。したがって、瞑想を通じて理解されるあらゆる現象は、研究や熟考によって対象に関与する単なる通常の意識では理解できないということを認識しなさい。そして、如来がこの上なく深い教義について語られた教示を聞いても、それを拒絶したり否定したりしてはならない²⁵。

²⁴ *Bodhisattvabhūmi*, Chap.17, Toh No.4037, f.136b1-4. Pd Vol.73, p.860. Ibid.Section 1.17.6を参照。/ Cf. Ibid. p.257, 1.8-16.

²⁵ *Bodhisattvabhūmi*, Chap.17, Toh No.4037, f.136b4-5. Pd Vol.73, p.860. Ibid.Section 1.17.6を参照。/ Cf. Ibid. p.257, 1.16-21.

三種類の対象による実在の確認

すべての批判的考察の対象は、三種類の認識可能な対象（prameya）に包含される。そして、三種類の認識対象は、それを認識する心が理性に基づく推論に依存しているか、正しい認識に依拠しているか、などによって区別される。つまり、(1) 目の意識によって観察される物質的な形のような、直接的な知覚によって経験される対象がある。また、(2) 遠くの峠の向こうに火があることを煙を論理的な記号として理解するように、経験によって直接確立されないが、客観的事実に基づく推論によって成立する対象がある。最後に、(3) 直接的な感覚的経験によっても客観的事実に基づく推論によっても確認することができないが、他人の正しい証言に依拠する確信に基づく推論によって確立される対象のカテゴリーがある。このように、三つのカテゴリーがある。

1. 明らかな知覚可能な実在
2. やや隠された実在
3. 極めて隠された実在

極めて隠された実在とは、例えば、両親の発言によって自分の生年月日を知ることができたり、歴史的記述によってのみ知ることができる過去の様々な出来事など、日常的な事実であっても、正しい証言によってのみ知ることができるようなものを指す。しかし、ある種の極めて隠された実在は、仏陀の正しい経典を参照することによってのみ認識することができるのである。

このような文脈で、仏陀の証言が正しいかどうかを理解することができる。要点は、「富は寛容から生じる、何故なら経典にそう書いてあるから」というように、証言そのものを論理的な証明として挙げることではない。そうではなく、(1) 経典の記述内容が直接的な認識や論理的推論と矛盾しないこと、(2) 経典の言葉が直接的にも間接的にも前後の経典の記述と矛盾しないこと、(3) 記述者に下心などが無いこと、を立証して推論を進めるのである。重要なのは、経典の証言を推論の根拠とする場合、以上のような条件が満たされなければならないということである。このことについては、後段で詳説する。つまり、ナーランダー諸師の伝統の中で、実在の本質に関する提示が決着したとき、それはこれら三つの認識論的戦略を参照することによって達成された。彼らの体系においては、客観的事実に基づく推理による推論の方が、正しい聖典、あるいは証言に基づく推論よりも重要であると認められていた。しかし、客観的事実に基づく推論と比較すると、直接知覚された経験による正しい認識がより重要であると認められた。

四つの原理に根ざした分析

菩薩の正典²⁶ (Bodhisattvapiṭaka, 菩薩藏) には、実在の本質を考察する方法として、四つの推論原理 (四種道理) が挙げられている。

1. **本性の原理 (法爾道理)** は、物事の存在様式を基礎とし、物事の特定の性格、または自然の本質、または実在性を指す。
2. **作用の原理 (作用道理)** は、本性の原理を基礎とし、それ自身の本質的な性質の基本的な状態に調和するように行われるあらゆる機能を指す。
3. **依存性の原理 (歎待道理)** は、作用の原理を基礎とし、原因と結果、部分と集合、作用と作者と作用対象などの三者関係など、自然な依存の様式で明らかにされるように、あるものが他のものにどのように依存しているかを指す。
4. **証明の原理 (証成道理)** は、最初の三つの原理 (本性、作用、依存性) を基礎とし、次のような形式的理由を定式化することによって命題を証明する能力を指す。「これだから、それでなければならない」「これは存在するから、それは存在しなければならない」「これではないから、それであってはならない」「これが存在しないから、それは存在してはならない」など。これを**証明の原理**という。

したがって、四つの推論の法則は、(1) あるものの個々の自然的本質、(2) その自然的本質に支えられたあらゆる作用、(3) あるものがその作用に依存して他のものに依存する方法、(4) それらがそのように依存する理由に基づいて、あるがままのものの存在様式に依存している。これらの推論の法則は、心がどのように対象を識別するのかを説明する章で詳説する。

²⁶ 菩薩の正典 (byang sems kyi sde snod) とは、アサンガが『阿毘達磨集論』の中で、経典分類法である十二分教中の第十番目、方広 (vaipulya) 部に位置づけられるものである。これは、最高の完全な悟りを得る方法、十力、無垢なる超越的な叡智、菩薩道などを教える著作からなる。Abhidharmasamuccaya: The Compendium of the Higher Teaching (Philosophy). Originally translated into French by Walpola Rahula. English translation from the French by Sara Boin-Webb. Fremont, CA: Asian Humanities Press, 2001, p.180 を参照。

因果関係と縁起

因果関係と縁起の体系は、四つの推論の原理のうち、**依存性の原理**と**作用の原理**を表している。この二つの事柄は、仏教の伝統の中で非常に重要視される。何故なら、宇宙とそこに住む人々の大きな進化から、特定の時間に特定の場所で雨が降るといったような特定の個別事象まで、あらゆるものの起源が説明されるのは、因果関係と縁起に基づいているからである。同様に、仏教徒自身の体系においても、輪廻²⁷の生存の中で、衆生が業²⁸と煩惱²⁹の力によって循環する様態から、輪廻転生する原因と条件が徐々に終結し、最高の卓越性³⁰に到る過程まで、すべてが原因と結果の法則によってのみ達成されると説明されている。このように、因果関係の理論は、事実の面から説明するにせよ、歴史的な記述の面から説明するにせよ、仏教哲学の極めて重要な特徴を構成している。

仏陀自身については、ヴァーラーナシー (Vārāṇasī) で四諦に関わる法輪³¹を転じたとき (初転法輪)、苦しみに至る過程と幸せに至る過程の二種類の因果関係を述べて、四諦の原理を明確に示した。苦諦 (結果) と集諦 (苦を生じさせる業と煩惱) を説き、滅諦 (結果) と、道諦 (そのような苦の止滅を達成させるもの) を説いた。

幸せと苦しみの因果関係を詳しく説明するとき、仏陀は十二項目の縁起 (十二支縁起) を用いて説明するだけでなく³²、この十二項目の各項目が、それぞれ先行する項目からどのように生じ、後続の項目の発生が連鎖の中で先行する項目にどのように依存しているかを説いた (順観)。同様に、仏陀は、先行する項目が断滅することによって後続の項目が断滅し、後続の項目の断滅は、連鎖の中で先行する項目の断滅に依存することを説いたのである (逆観)。このように、仏陀は因果関係の法則を、結果は必ず原因に従うという観点から、極めて明瞭に説いた。仏弟子たちは、仏陀が因果関係や縁起を宣言したやり方を非常に重要視していた。例えば、「縁起の心髄 (縁起法頌)」として知られる次のような詩節がある。

²⁷ 輪廻 (Samsāra) は、しばしば世界や宇宙一般を指すのに使われるが、この言葉の本質的な意味は、人の帰属の基礎となる汚染された五蘊や汚染された心身の連続体である。

²⁸ 業 (karma) とは、意図や意志という精神的な要因を指す。普通の人の心の流れの中に、徳のある意図と徳のない意図が生じると、そのような倫理的に強力な意図は、意識に性向または業の種を残す。このような種は、一度目覚めれば、その倫理的価値に相応した結果を生み出す。

²⁹ 煩惱 (kleśa) とは、六根本煩惱と二十支随煩惱からなる苦悩的な精神状態や否定的な感情のことを指す。

³⁰ 最高の卓越性 (niḥśreyasa) とは、「これ以上の徳はない」という意味で、解脱や悟りのことを指す。

³¹ 法輪 (dharmacakra) とは、完全に悟った存在 (仏陀) の十二の主な行いのうちの十一番目の行いを指す。仏陀がダルマ (仏教の教え) を教える過程を表し、それは車輪を回すことに喩えられ、そこから実在の本質、または無我 (ダルマ) の直接的理解が、資格ある弟子たちの心の流れの中に確立され、彼らが超越的な道に入門することとなる。

³² 十二支縁起の項目は、(1) 根本的無知 (無明)、(2) 行為 (行)、(3) 意識 (識)、(4) 名称とかたち (形色)、(5) 六感官 (六処)、(6) 接触 (触)、(7) 感覚 (受)、(8) 渴望 (愛)、(9) 執着 (取)、(10) 生存 (有)、(11) 誕生 (生)、(12) 老化と死 (老死) である。

あらゆる諸現象は諸原因から生じる。如来はそれらの諸原因について説いた。またこれらの諸原因の断滅をもたらすものも。これもまた偉大な沙門は教えたのである³³。

古来、この経文を寺院の扉や梁の上などに刻むという伝承があり、古代の遺物や遺跡をよく調べると、その事実を知ることができる。しかし、この縁起の体系は、因果関係という勧転において、經典にはどのように記されているのか。『稲竿経』（*Śālistamba-sūtra*）には次のように説かれている。

諸原因と関係する外界の縁起の諸現象は何であるのかというならば、すなわち、種から芽が、芽から葉が、葉から茎が、茎から枝が、枝から蕾が、蕾から花が、花から果実が生じる。もし種が無いならば、芽は生じず、乃至、花が無いならば、果実に至るまでもまた生じない。種があれば、芽が現れるようになる。同様に、花があれば、果実までのすべてが現れるようになる⁵⁵。

と。そして、

諸現象（縁）と関係する外界の縁起の諸現象は、どのように見るべきかというならば、それらは六つの要素の集合から生じるのである。それら集合している六つの要素とは何かというならば、地、水、火、風、空間、時間の要素の集合にであり、それらの集合から生じている外界の縁起せる諸現象が、それらの諸条件に依存していると見るべきである³⁴。

このように、『稲竿経』では、芽のような外界の縁起せる諸現象が、原因と条件に依存して生じることを説いている。さらに同経では、外界の縁起せる諸現象と同様に、心的形成³⁵や意思などの内的な縁起せる諸現象についても、「同様に、内的な縁起せる諸現象にも二種ある³⁶。」と述べ、原因と条件によって生起すると説いている。そして、この因縁生起（縁起）の体系を詳細に検討すると、（1）創造主の事前設計がないという条件、（2）

³³ 『縁起経』（*Pratītyasamutpāda-sūtra*）では、別の訳文で引用されている。

どのような諸現象が原因によって生じるのか、それらの原因は何か、そして、それらの断滅は何かを、如来は説いた。まさにこのことが偉大な沙門によって述べられたのである。

(*Pratītyasamutpāda-sūtra*, Toh No.212, f.125b, Pd Vol.62, p.343.)

³⁴ *Śālistamba-sūtra*. Toh No.210, f.117b. Pd Vol.62, p.318.

³⁵ 心理的形成、あるいは形成要因 (*samskāra*, 行) は、五蘊のうちに行蘊を指す。この行蘊は、他の四蘊に包含されないすべての無常なる実体を指し、アサンガのリストにおける五十一の行のうち、四十九を構成する中立、正、負の感情、さらに時間、人、無常などが含まれる。

³⁶ *Śālistamba-sūtra*. Toh No.210, f.118b. Pd Vol. 62, p.321.

無常という条件、(3)可能性という条件、の三つに集約出来よう。この三つの条件は、外界システムとその住民の進化と形成に関する議論により深く関係するため、後の章で取り上げることにする³⁷。

一般に、原因を分類する方法には、直接原因と間接原因という分け方と、実質的原因と協力的条件という分け方がある。この原因分類の体系は、物事の本質、因果、機能を検討する場合など、仏教の伝統が実在に関するプレゼンテーションを説明する際に、多くの文脈で重要なポイントとなる。また、原因の中に重要性の違いがあること、結果との時間的な近さの違い、結果の様々な側面が原因の特定の属性の刻印を表していることなど、他の要素もある。これらの点については、後段で詳述する³⁸。

要約すると、仏教の伝統では、

- ・原因なくして結果が生じることは認められない。
- ・宇宙が創造主による事前の設計から生じると主張することはできない。
- ・恒常的な原因から物事が発生することは非論理的である。
- ・原因と結果は整合的でなければならない。
- ・特定の原因から特定の結果が生じることは、実在の性質であり、そうでなければならない。
- ・原因と結果の関係は、諸現象の自然な状態である。
- ・縁起の法則により、様々な原因や条件から結果が生じる。

さて、この因縁生起（縁起）の体系は、すべての仏教哲学の学派に共通する縁起の理解を表している。しかし、縁起には、因果的依存の概念よりも微妙な、部分への依存という別の意味もある。また、中観派の文献に見られる、部分への依存よりもさらに微妙な縁起の意味もある。これらについては、哲学の項で述べよう³⁹。

³⁷ 第二十一章を参照。

³⁸ 第十一章を参照。

³⁹ このテーマは、シリーズ第四巻で詳説する。

矛盾と関係の法則による推論

以上の縁起と四つの推論原理の節では、ある結果がその原因に依存するような非同時的な依存の様式と、部分とその部分を所有する集合、あるいは複合的な全体とその構成要素である一部などの中のような同時的な依存の様式の、二つの依存の様式があらわれた。古典インド論理学者たちの文献では、これらの関係を「結合関係」と呼び、二種類の関係をそれぞれ、因果関係、本質的關係と呼んでいる。前者は時間的に順次的な原因と結果の関係を明らかにし、後者は時間的に同時的な依存関係を示している。そして、本質的關係には、様々な種類がある。例えば、壺と壺の構成要素のような全体と部分の関係、同じ本質を持つ糸杉と木のようなある事例とそれが属するクラス（類）の関係、作られたものであることと無常であることのような、相互に包含する諸現象に対して存在する同一的な本質の関係、などがある。

本質的に関連する諸現象は、言語や概念によって区別されるが、それらの実在性という点では、そのような区別は存在しない。例えば、「音声は無常である」という命題が「それは作られたものであるから」という論証因に基づいて推理されるのは、主として、作られたものであることと無常であることとの間に、自然な本質的關係が存在するためである。このように、古典インド論理学者たちは、実在の本質について洗練された合理的な分析を行う際に、論理的な関係が極めて重要な要点であると力説している。

ある種の現象は、一方が存在しなければ他方も存在しないという、この種の内在的な論理的結合を有している。また、内在的な相互排除の関係を持つ諸現象もある。例えば、「作られたものであるから」という論理的理由によって、「音声は無常である」ということを立証することができるのは、「常住であること」と「無常であること」とが、互いに排除し合うという意味で矛盾するからである。「作られたものであるから」という論理的理由は、対立物の属性である「常住であること」を排除し、作られたものは必ず無常であるという論理的帰結がある。同様に、「その場所に激しい炎が存在するから」という論理的理由が、同じ場所にある、冷たいという感覚から生じる鳥肌のようなものの存在を否定するとき、冷たい温度の結果の存在を否定できるということは、鳥肌の原因である冷たい温度と激しい炎の存在が相容れないことによって矛盾しているからである。論理学や認識論の文献では、このような証明は、**相互に排他的に矛盾する現象の認識に基づく論理的な理由**と呼ばれている⁴⁰。

要するに、このような実在の基本的見方を立証する過程では、曖昧な事柄を形式的な推論によって明確にすることが不可欠である。その際、論理的理由と対立物の属性が相互に排他的であり、推論による認識が反対の見方を覆すなどといった、矛盾の原理がどのように作用するかの理解を欠くと、与えられた主張命題を立証することが出来なくなる。従っ

⁴⁰ この種の理由についてのさらなる考察は、Klein, Anne. *Knowing, Naming, and Negation: A Sourcebook of Tibetan Sautrāntika*. Ithaca, NY: Snow Lion Publications, 1991, p.273 を参照。

て、これらの点を理解することが重要であるが、矛盾と関係の詳細な議論は後の節に譲る⁴¹。

先に、ナーランダー諸師の体系が論証理由の使用を重視していることを述べた。また、自然界の法則、すなわち本性の原理、依存の原理、作用の原理を出発点とし、証明の原理を用いて、曖昧なままの事実に関する推論を立証することを述べた。しかし、客観的事実に基づく、そうした推論の限界や範囲、つまり、それが何を否定でき、何を否定できないかということ認識することも重要である。

この点を認識して、仏教論理学者たちは、ある特定の論証因が、**存在を証明しないものと非存在を証明するもの**とを区別する必要があると述べている。同様に、ある特定の正しい認識が**発見しないものと、その正しい認識が非存在として発見するもの**、ある特定の論証因が**そうであると証明しないものと、その論証因がそうではないと証明するもの**、ある特定の正しい認識が**そうであると立証しないものと、その正しい認識がそうではないと立証するもの**、を区別する必要があるのである。

⁴¹ pp.174-179 を参照。

第三章 問答集による推論

論理的な推論を通じて、否定と肯定がどのように立証されるかに関する要点に基づいて、特にダルマキールティの七つの論書⁴²とその注釈書一言語と概念がその対象とどのように関係するかを検討する際に確定される要点や、推論的認識の根拠となる論理的理由についての提示、また他者の主張における内的矛盾を明らかにする論駁や帰謬論証などを活用して、これらの要点を初学者のための論理学の訓練カリキュラムとして編纂された問答集 (*dūra*) と呼ばれる文献が、チベットの論理学者たちの間で広まった。本章では、この論理学の体系について、導入としてその概要を紹介する。

チベットでは、十二世紀のカダム派の学匠チャパ・チューキセンゲ (*Phya pa chos kyi seng ge*, 1109-1169) が独自の論理体系を導入することで、問答集が誕生した。論理学の大家であったチャパは、論理学と認識論に対する造詣が非常に深く、『論理学要綱意闡括』の偈および自註 (*Tshad ma bsdus pa yid kyi mun sel rtsa 'grel*) と『論理学意闡括』 (*Tshad ma yid kyi mun sel*) を著した⁴³。

これらの文献においてチャパは、正しい認識とそれが把握する対象、客観的世界と主観的心、同一と別異、普遍と特殊、実体的存在と抽象的存在、矛盾と関係、原因と結果、定義の三部構成 (定義的特質、定義対象、定義基体) など、論理学や認識論のテーマを要約している。そして、これらの話題の提示を、他者の立場への反論、自らの立場の提示、反論への反論の三つの枠組みで体系化した。

また、『論理学意闡括』などの文献は、認識論 (*lorik*) や証因論 (*tarik*) などの、初学者向けの入門書にも影響を与えた。現在でもチベットの学問の中心地では、このような認識論、証因論、問答集を学ぶ伝統は、衰えることなく続いている。

チャパの『論理学要綱』に基づいて、問答集は、論証集 (*bsdus sbyor*)、問答集 (*bsdus grwa*)、要綱 (*bsdus pa*) などの名称で、様々な簡略版が登場する。そして、『論理学要綱』で明示された点を、以下の十八の個別のトピックに整理することが広く定着した⁴⁴。

- | | |
|--|--|
| (1) 色、白と赤
(<i>kha dog dkar mar</i>) | (2) 実体的存在と抽象的存在
(<i>rdzas chos ldog chos</i>) |
| (3) 矛盾と非矛盾
(<i>'gal ba dang mi 'gal ba</i>) | (4) 普遍と特殊
(<i>spyi dang bye brag</i>) |

⁴² ダルマキールティの七論書は以下の通り。『量評釈』 (*Pramāṇavārttika*)、『量決訳』 (*Pramāṇaviniścaya*)、『正理一滴』 (*Nyāyabindu*)、『証因一滴』 (*Hetubindu*)、『関係の考察』 (*Sambandhaparīkṣā*)、『問答における正理』 (*Vādanyāya*)、『他相続の証明』 (*Samtānāntarasiddhi*)。

⁴³ サンプ寺の第六代住持であるチャパ・チューキセンゲは、様々なテーマに関する著作を残したが、これら三つの文献は、特に仏教論理学 (*pramāṇa*) の学生向けの入門書として構成されている。彼の有名な十八のトピックは、『論理学要綱意闡括』の偈および自註に記載されており、チベットにおける仏教論理学の伝統の始まりとなった。

⁴⁴ これらのトピックの概要については、Onoda Shunzo, “*bsDus grwa Literature*” In *Tibetan Literature: Studies in Genre*, edited by J.I. Cabezon and R. R. Jackson, Ithaca, NY: Snow Lion Publications, 1996, pp.187-291 を参照。

- | | |
|---|--|
| (5) 関係と関係の不在
(`brel ba dang ma `brel ba) | (6) 区別と非別
(tha dad dang tha mi dad) |
| (7) 肯定的遍充と否定的遍充
(rjes su `gro ldog) | (8) 原因と結果
(rygu dang `bras bu) |
| (9) 前段階、中間段階、後段階
(snga btsan bar btsan phyi btsan) | (10) 定義的特質と定義対象
(mtshan nyid dang mtshon bya) |
| (11) 多重論証因と多重所証
(rtags mang bsal mang) | (12) 前進否定と後退否定
(dgag pa `phar tshur gnyis) |
| (13) 直接矛盾と間接矛盾
(dngos `gal dang brgyud `gal) | (14) 二種類の論理的内包
(khyab mnyam rnam pa gnyis) |
| (15) 「～である」と「～ではない」
(yin gyur min gyur) | (16) 「～である」の逆と「～ではない」の逆
(yin log min log) |
| (17) 存在の理解と非存在の理解
(yod rtogs med rtogs) | (18) 常住の認識と事物の認識 ⁴⁵ 。
(rtag rtogs dngos rtogs) |

『論理学要綱』のトピックを数え上げる後代の体系においては、二十一、二十五、二十七など、様々な列挙方法が提示されている。

論理的推論の訓練

問答は、伝統的に、他者の立場への反論、自らの立場の提示、自らの立場への反論、という三つのアプローチで提示される。この方法は、論理的な思考を身につけるための重要な訓練となる。まず、あるテーマを分析するとき、他人の見解のうち誤りのあるものを挙げて反論し、次に自身の見解を述べ、自らの立場に対して反論があれば、その批判的な反論を排斥するというものである。どのようなテーマであっても、この、反論、立論、反論への反論という三通りの方法で批判的な分析を行うことで、論点を総合的に理解することができる。したがって、問答集による論理的推論は、批判的探究を行う上で極めて有用な体系である。

さて、問答集に基づく推論を行う際、論述の構成要素は大きく (1) 論証因、すなわち論理的な理由、(2) 所証 (命題の述語、論証しようとしている属性)、(3) 論争の主題、の三つに分けられる。

自身の陳述をこれら三つの構成要素に分け、帰謬論証の仕方で論証式を構成することによって、否定と肯定が行われ、立論者と反論者との議論は、物事の要点を明確にすることになる。この、**論証因**、**所証**、**主題**という三つの構成要素を説明するために、次のような帰謬論証を例題に取り上げる。

音声を主題として、それが作られたものではないことが帰結する。何故ならば、常住

⁴⁵ これらの各トピックの概要については、巻末の付録 (pp.429-433) を参照されたい。

であるからである⁴⁶。

この帰謬論証では、「音声」が主題、「作られたものではない」ことが所証、「常住である」ことが論証因となる。主題の「音声」は、所証が「作られたものではない」と集合しており、「音声は作られたものではない」というのは、この帰謬論証の主張命題である。

「常住であるものならば、作られたものではないことによって遍充される（あるものが常住であるならば、それは必ず作られたものではない）」という論理的必然性が、この帰謬論証における直接的な**遍充関係**である。所証の「作られたものではない」ことの反対は「作られたものである」ことである。これが、この帰謬論証の所証を逆転したものである。同様に、論証因である「常住である」ことの反対は「無常である」ことである。これは帰謬論証における論証因を逆転したものである。このような論証の構成要素の理解は、他の帰謬論証においても同様である。

「音声を主題として、作られたものではないことが帰結する。何故ならば、常住であるから」という論証式について、論証因、所証、主題は、以下の表の通りである。

主題 (chos can)	所証 (gsal ba)	論証因 (rtgs)
音声	作られたものではない	常住である
主張命題 (dam bcal)	反所証 (chos log)	反論証因 (rtags log)
音声は作られたものではない	作られたものである	無常である

問答において返答をする場合、論証式の構成要素それぞれに対応した様々な形式がある。一般に、所証に対する返答は、「同意する（然り）」と「何故か（反論）」の二つである。また、論証因に関しては、「論証因が成立しない」（不成因）と、「遍充関係が成立しない」（不定因）の二つの返答がある。したがって、全部で四つがある。この他にも、「逆の遍充関係がある」（相違因）、「疑いがある」（猶予不成）など、多くの返答の仕方がある。

さて、以上の返答の仕方のうち、(1)「同意する」とは、「然り、主題が所証と一致することに同意する」という意味で、陳述されている主張命題を認めることを示す。例えば、「音声を主題として、無常であることが帰結する、何故ならば、作られたものであるから」という定式において、「同意する」と返答すれば、「音声は無常である」と同意していることになる。また、特定の主題がなく所証だけが定式化され、「同意する」と返答すれば、その所証を認めることになる。例えば、「それが存在することが帰結する」と提示された場合、「然り、存在することに同意する」と返答する。

(2)「何故か」とは、提示された帰謬論証の主張命題が、正しい認識によって立証されていない場合に発せられる。ここで、「何故か」という返答は、その主張命題を認めないこと、および陳述された論証因に関してさらに質問をしているということを示すために発

⁴⁶ この帰謬論証は、音声で作られたものであることを認めながらも、音声は常住なものであると主張し、また、あるものが常住であるならば、それは作られたものではないことを認める人に対して、典型的に提示されるものである。

せられる。例えば、「音声を主題として、常住であることが帰結する」と提示された場合、「何故か」と返答すれば、それは「何故、音声は常住であるのか」という意味である。

(3)「論証因が成立しない」とは、「その主題において、その陳述された論証因に一致するものとして成立しない」という意味である。例えば、「音声を主題として、作られたものではないことが帰結する。何故ならば、常住であるから」と提示された場合、「音声は常住であるという論証因は成立しない」と返答する場合である。また、主題がなく論証因のみが陳述されていて、「その論証因は成立しない」と答える場合、「その論証因はそれがそうであることを立証しない」と述べていることになる。例えば、「何故ならば、壺であるから」と提示された場合、「論証因はそれが壺であることを立証しない」と返答する場合である。

(4)「遍充関係が成立しない」とは、「あるものが論証因であるならば、それは必ず所証であるという論理的必然性がない」という意味である。例えば、「音声を主題として、常住であることが帰結する。何故ならば、音声は認識できる対象であるから」と提示された場合、「あるものが認識できる対象であるからといって、必ずしもそれが常住であるということにはならない」と返答する場合である。

「逆の遍充関係がある」とは、その逆、つまり、「あるものが論証因であるならば、それは所証であってはならない（所証と逆のことを遍充してしまう）」という意味である。例えば、「音声を主題として、常住なものであることが帰結する。何故ならば、聴くことができる対象であるから」と提示された場合、あるものが聴くことができる対象であるならば、それは必ず常住ではない」と返答する場合である。

「疑いがある」とは、「所証が主題との関係で存在するかどうか疑いがある」という意味である。例えば、「私の目の前にいる子供を主題として、その子供は八十歳まで生きることが帰結する」と提示された場合、「所証に疑いがある」と返答する場合である。

問答における質問に対する返答の一覧は以下の通りである。

1. 「同意する」 (‘dod)	陳述された主題と所証が一致することを認めるということを意味する	主題（または論争の基盤）とその所証との関係を扱う
2. 「何故か」 (ci'i phyir)	陳述された主題と所証が一致することを認めず、さらに証明を求めるということを意味する	
3. 「論証因が成立しない」 (rtags ma grub)	陳述された主題が論証因と一致することを認めないということを意味する	主題とその論証因との関係を扱う
4. 「遍充関係が成立しない」 (khyab pa ma grub)	あるものが論証因であるからといって、それは必ずしも陳述された所証で	論証因とその所証との関係を扱う

	はないということの意味する	
5. 「逆の遍充関係がある」 (‘gal khyab)	あるものが陳述された論証因であるならば、それは陳述された所証 B であってはならないということの意味する	
6. 「疑いがある」 (the tshom za)	陳述された所証や論証因などに疑問や躊躇がある	主題、所証、もしくは論証因の任意の二つの関係を扱う

一方で、初期のインド仏典では、質問に対する返答の仕方として、(1) 定言的陳述（一向記）、(2) 条件付陳述（分別記）、(3) 質問の形式による返答（反詰記）、(4) 沈黙の形式による返答（捨置記、あるいは無記）の四種類が設定されている。例えば、世親の『俱舍論』には次のように述べられている。

一向〔記〕と分別〔記〕と反詰〔記〕と捨置記は、...⁴⁷

例を挙げると、「あらゆる物質的なものは無常であるか」という問いに対して、「然り」という定言的な返答が第一の仕方の例とされる。「あらゆる無常な実体は物質的であるか」という問いに対して、「空間的な障害性を持つそれらは物質的であるが、内的な経験の性質を持つそれらは物質的ではない」と返答するのが、第二の仕方の例である。「この木は高いか、低いか」という質問に対して、「どれに関してそのように訊いているのか」と、質問することで答えることが出来よう。そして、質問者がより低い木を指して言ったときに「その木に関して」と言ったときに「それは高い」と返答し、より高い木を指して言ったときに「それは低い」と返答すれば、これは第三の仕方の例である。また、ある特定の目的や理由のために、沈黙を選ぶことによって返答する必要がある何らかの文脈もある。これが第四の返答の仕方の例である。

問答集の論理的推論を用いて、あるトピックを総合的に分析する一つの極めて重要な方法が、三つの場合分け（三句分別）と四つの場合分け（四句分別）という、観点から概念関係を識別する体系である⁴⁸。この体系では、(1) 三句分別 (mu gsum)、(2) 四句分別 (mu bzhi)、(3) 矛盾 (‘gal ba)、(4) 同義 (don gcig) という四種類の順列が特定されている。三句分別や四句分別などを列挙する体系は、二つの物事の間にかなる概念的差異があるかを、最も包括的に検討するための簡単な方法である。

⁴⁷ *Abhidharmakośa*, Chap.5, k.22ab. Toh No.4089, f.16b. Pd Vol.79, p.38. / Cf. 小谷信千代, 本庄良文『俱舍論の原典研究：随眠品』大蔵出版, 2007, p.96.

⁴⁸ 三句分別と四句分別に関する詳細な解説については、Tom. J. F. Tillemans, “What Happened to the Third and Fourth Lemmas in Tibet?” In *How Do Mādhyamikas Think?: And Other Essays on the Buddhist Philosophy of the Middle*. Somerville, MA: Wisdom Publications, 2016 を参照。また、Daniel. E. Perdue, *The Course in Buddhist Reasoning and Debate: An Approach to Analytical Thinking Drawn from Indian & Tibetan Sources*. Boston: Snow Lion Publications, 2014 を参照。

三句分別：例えば、人とチベット人の違いについて、三つの可能性がある。：(1) チベット人の子供は両方である、という第一の可能性、(2) インド人は人であるがチベット人ではない、という第二の可能性、(3) 壺はそのどちらでもない、という第三の可能性。

四句分別：例えば、大工とチベット人の間には、四つの可能性がある。：(1) チベット人の大工は両方である、という第一の可能性、(2) インドの大工は前者であるが後者ではない、という第二の可能性、(3) チベット人の子供は後者だが前者ではない、という第三の可能性、(4) 柱はどちらでもない、という第四の可能性。

矛盾：相互排他的諸現象とは、馬と牛、白と赤、常住であることと無常であることなど、共通の基体を持たない別個の存在同士の関係である。これらの組合せの場合、両方である例は見出し得ない。

同義：相互包括的諸現象とは、二つの存在が相互に共通の基体を持つだけでなく、八種の遍充関係を持つもの同士の関係である。例えば、作られたものであることと無常であること、火と熱く燃えるものなどの組合せがある。八種の遍充関係とは、「～である (yin)」に関わる二種の必然性、「～ではない (ma yin)」に関わる二種の必然性、「～がある (yod)」に関わる二種の必然性、最後に「～がない (med)」に関わる二種の必然性を意味する。以下に、それぞれの順序で説明する。

- (1-2) 例えば、あるものが作られたものであるならば、それは必ず無常であることになる。；あるものが無常であるならば、それは必ず作られたものであることになる。
- (3-4) 例えば、あるものが作られたものではないならば、それは必ず無常ではないことになる。；あるものが無常ではないならば、それは必ず作られたものではないことになる。
- (5-6) 例えば、ある作られたものがあるならば、それは必ず無常なものがあることになる。；ある無常なものがあるならば、必ず作られたものがあることになる。
- (7-8) 例えば、作られたものがないならば、必ず無常なものがないことになる。無常なものがないならば、必ず作られたものがないことになる。

要するに、チベットの学匠チャパ・チューキセンゲが創案した問答集によるこの論理学の伝統は、様々な知識分野に従事する際に、批判的推論の扉を大きく開くための優れた方法である。それは伝統的な知識分野の研究に関連するだけでなく、現代のテーマにも適用できる極めて効果的な推論体系を構成している。本章では、簡単な紹介に留めるが、以上の推論体系を詳細に研究したい人は、『問答集』の文献そのものを参照されたい⁴⁹。

⁴⁹ ダライ・ラマ親下が述べているように、「論理的な分析を用いる推論の道は、自身の洞察の精度をさらに高め、素早い心を養うのに役立つだろう。どのような種類の知識であっても、注意深く機敏な心で確実に知ることができるようになる、それがこの方法の大きな利点である。したがって、この推論の道に基づ

略号表

- Toh No. : 宇井伯寿, 鈴木宗忠, 金倉圓照, 多田等観 編『西藏大蔵経総目録』東北帝国大学文学部, 1934.
- Pd : 『中華大蔵経 甘珠爾・丹珠爾 (対勘本)』中国蔵学出版社.

参考文献

青原令知 編

- [2015] 『俱舎：絶ゆることなき法の流れ』自照社出版.

沖本克己, 福田洋一 編

- [2010] 『新アジア仏教史 9 チベット 須弥山の仏教世界』佼成出版社.

小野田俊蔵

- [1979] 「チベット僧院に於ける問答の類型」『仏教史学研究』22(1), pp.1-16.
- [2000] 「チベット僧院での仏教研究法：問答学習の特徴と効果について」『日本仏教学会年報』66, pp.133-143.

桂紹隆

- [1988] 『インド人の論理学：問答法から帰納法へ』中央公論社. (再版：法蔵館, 2021)

斎藤明ほか

- [2011] 『『俱舎論』を中心とした五位七十五法の定義的用例集：仏教用語の用例集（パウッダコーシャ）および現代基準訳語集 1』インド学仏教学叢書 14, 山喜房佛書林.

ダライ・ラマ 14 世 (テンジン・ギャツォ) 著 / 福田洋一 訳

- [1996] 『ダライ・ラマの仏教哲学講義：苦しみから菩提へ』大東出版社.

チベット中央政權文部省 著 / 石濱裕美子, 福田洋一 訳

- [2012] 『世界の教科書シリーズ 35 チベット仏教の歴史と宗教』明石書店.

平川彰

- [2011] 『インド仏教史上・下 (新版)』春秋社.

いて、「Aであるならば、Bでなければならない」、「Bであるならば、必ずAである」などと、三句分別、四句分別、矛盾、同義の観点から分析することによって、例外なくあらゆる主題にアクセスすることができるようになるのである。そして、この方法を適用すれば、そのようなテーマについて正確で詳細な理解を深めることができるという大きな利点がある。

付 記

本稿は、講義内のテキストリーディングにおける成果として作成した、英語版をベースとした現時点での暫定的な翻訳である。本来であれば、チベット語による原本や、一次資料の原典を併せて精読し、より正確な日本語訳を検討すべきであったが、編者の力量不足のため、文章表現の不自然さ、解説として不親切な表現となっている点など、多くの問題が残る翻訳となってしまった。しかしながら、本書がこれまでの概説書とは画一的であり、チベット仏教において理解されている哲学を体系的に理解する書として優れているのは言うまでもない。チベット語原本や英語版の読解への橋渡しとして、本稿が少しでも役に立てれば幸いである。

最後に、本稿の日本語訳を作成するにあたり、龍谷大学、大谷大学の諸先生方から御助言を賜りました。ここに記して感謝申し上げます。併せて、本稿の下地となる翻訳作業を担って下さった名市大の学生の皆様、そして何より、此度の貴重な機会を提供して下さい、ご指導下さった榎木美樹先生に対して、ここに厚く御礼申し上げます。

(2023年3月14日 浅井教祥)

5. 学生レポート

四聖諦について

214638 佐藤さくら

〈目次〉

- 1 はじめに
- 2 仏教徒とは
- 3 仏教の特徴
- 4 四諦十六行相
- 5 おわりに

1 はじめに

私は、一年間この講義でチベット仏教について学んだ。チベット仏教を学ぶ際に、「Science and Philosophy in the Indian Buddhist Classics」という教科書を使用した。教科書を使った学習の際、ゲルク派の僧侶が講師として教えてくださった。教科書に書いてあることで理解するのが難しい箇所は何度も繰り返し、私たちが分かるまで教えてくださった。授業中に少し質疑応答の時間があり、様々な質問にも答えてもらった。また、僧侶たちが行っている問答の練習も、実際にゲシェ・ラが授業中に一緒に行ってくれた。

ゲシェ・ラの講義を聴いている中で、無常について説明してくれている時、なんとなくは分かっても完全に理解することはとても難しく感じた。それは、私が仏教の知識が無いために、仏教を学ぶに当たって前提として持っていなければならないものがかけていたからだと思う。そのため、このレポートでは、仏教の基礎である四聖諦について調べていこうと思う。始生代の記述・整理に関しては、テンジン、ギャツォ・ダライ・ラマ14世著の『ダライ・ラマの仏教哲学講義 苦しみから菩提へ』を全面的に参照した。テンジン・ギャツォ・ダライ・ラマ14世は講師をしてくださったゲシェ・ラと同じゲルク派の最高権威であるため、この書を参照した。

2 仏教徒とは

仏教徒は、仏陀と法と僧伽を最終的な救済者として認める者であり、ある教えが仏教徒の者だと言えるための「四つの特徴的見解（四法印）」を受け入れる者のことである。そして、「教師としての救済者仏陀」、「本当に人を苦しみから救う法、教え」、「他人が苦しみから救われるように手助けする人の集団の僧伽」が苦しみから救い出してくれるものとして、これら3つの宝に対して帰依を表明している（テンジン 1996 pp.5-6）。

仏陀とは、身体、言葉、心という基本的要素を土台として仏陀としての優れた身体、言葉、心を開発し、その道を開拓して、一切を知る智慧の側面と仏陀の心の実相、究極的なあり方の側面を持つものである。

教えとは、「苦しみの真の消滅」と「苦しみを消滅させるための真の道」という要素を持つ。

精神的共同体（僧伽）とは、「真実を見た段階（見道）」という修行の道に到達した菩薩と声聞と独覚からなっている（テンジン 1996 pp.6-9）。

3 仏教の特徴

仏教には、「生じてきたもの一切は無常であるという諸行無常」、「煩惱によって汚れたものはすべて苦しみであるという一切行苦」、「存在するもの一切は空であり、無我であるという諸法無我」、「涅槃は一切が鎮まった境地であるという涅槃寂靜」という4つの重要な考え方がある（テンジン 1996 pp.11-12）。

4 四諦十六行相

四聖諦とは、釈尊が最初の説いた仏教の根本教説であり、真理を4種の方面から考察した者である。この4種には「この現実世界は苦であるという真理の苦諦」、「苦の原因は迷妄と執着にあるという集諦」、「迷妄を離れ、執着を断ち切ることが悟りの境界にいたることであるという滅諦」、「悟りの境界に至る具体的な実践方法は八正道であるという道諦」が含まれる。（ブリタニカ国際大百科事典）

ここからは、仏教の基本となる四聖諦について詳しく述べていきたい。

① 苦しみ（苦諦）

ここからは仏教において重要な考えにある「苦しみ」について論じていきたい。

「苦しみ」とは、真実とは逆のもの支配下にあるということである。真の苦しみ（苦諦）には、「無常（非常）」、「苦しみ（苦）」、「空」、「無我（非我）」の4つの性質がある。この4つの性質を悟ることによって、苦しくて悲惨な現実を好ましく望ましいものと捉えている我々の誤解に対抗できるようになる。私たちは苦しみである現実を、「純粋で清浄なもの」、「幸福なもの」、「このまま続くもの」、「実態のあるもの」と誤解している。しかし、上で述べたようにこれらは誤解なのである。

ここからは、苦諦の4つの性質について述べていく。

「無常」：人間の心身を構成している5つの複合体（五蘊）は、常に変異する性質であるため、「無常なもの」である。

「苦」：五蘊は煩惱と煩惱によって引き起された行為の力の支配下にあるため、苦しみそのものである。

「空」：心身を構成する5つの複合体（五蘊）からなる人間は、五蘊とは別の実体としての「自我」は存在しないため、消滅することのない永続的実体としての「自我」は持たない。

「無我」：五蘊が生まれたり、消滅したりすることによって、人間の自我も生滅している。私たちには永続する自我がないだけでなく、それ自体の力で存在する独立した自我も存在しないのである（テンジン 1996 pp.31-32）。

② 苦しみの起源（集諦）

苦しみの真の起源（集諦）には、「原因（因）」、「起源（集）」、「条件（縁）」、「生起（生）」という 4 つの性質がある。しかし、私たち人間は、「苦しみには原因がない」、「苦しみの原因は 1 つだけである」、「苦しみは絶対神の支配力によって生じるものである」、「苦しみの状態は一時的なものであるが本質は永続的なものである」と誤解している。

ここからは集諦の 4 つの性質について述べていく。

「原因」：苦しみの原因は執着（渴愛）である。執着は繰り返し何度も苦しみを生み出すため、苦しみの起源でもある。

「起源」：苦しみの起源は単一の原因ではなく様々な原因がある。

「条件」：輪廻における生への執着は苦しみを生み出すための補助条件としても機能する。

「生」：執着が強力に結果を生み出してしまふ（テンジン 1996 pp.33-34）。

③ 苦しみの消滅（滅諦）

苦しみの真の消滅（滅諦）には、「消滅（滅）」、「平静（静）」、「吉相（妙）」、「決定的な脱出（離）」という 4 つの性質がある。しかし、私たち人間は、「解脱は全く存在しない」、「煩惱に起源するある種の状態を解脱だと考えていること」、「実際には苦しみである現実を解脱の状態だと考えていること」、「解脱は存在するにしても、自分がそれとは無関係だと考えていること」と誤解している。

ここからは滅諦の 4 つの性質について述べていく。

「消滅」：取り除かれた苦しみが全てではなく一部だとしてもその苦しみの永遠に取り除かれる。

「平静」：取り除かれた苦しみが全てではなく一部であっても鎮められた煩惱は永遠に鎮められ、平静なものである。

「吉相」：真の消滅は煩惱から離れた状態にあり、利益と幸福をもたらす。

「脱出」：真の消滅は苦しみを克服したということであり、その苦しみの決して戻ってくることがない（テンジン 1996 pp.34-35）。

④ 苦しみを消滅させるための道（道諦）

苦しみの消滅に向かう真の道（道諦）には、「道」、「適切（如）」、「達成（行）」、「解放（出）」という 4 つの性質がある。しかし、私たちは道諦に関しても誤解している。「輪廻からの解脱に至る道は全く存在しない」、「無我を悟る智慧は解脱の道ではない」、「ある種の精神集中の状態が解脱への道である」、「いかなる苦しみも永遠に断ち切ることはない」と誤解している。

ここからは道諦の4つの性質について述べていく。

「道」：無我を認識している智慧は、解脱を達成する力がある。

「適切」：煩惱は事実になつた者ではなく、空性を認識している智慧の意識を生み出す道こそが事実に適っている。

「達成」：この道は物事の実相を誤りなく、直接悟るものであるので、解脱を達成させるものである。

「解脱」：無我を認識している智慧は輪廻の生を根こそぎにするので、決定的な解放である（テンジン 1996 pp.34-35）。

5 おわりに

執着が苦しみの原因であるということや、苦しみは消滅し、克服しうること、苦しみから解放される理論などを理解することは、苦しくて悲惨な現実を生きていくためにはとても重要なことだと思う。私の抱える悩みや苦しみについて考えたとき、執着さえなければ悩んだり苦しんだりすることはないのだろうと思う。しかし、苦しみの原因である執着を断ち切ることは難しいため、苦しみの原因となっている執着に少しずつ向き合い、取り除いていく必要があると思った。

授業中に生徒がゲシェ・ラに対して、自身の悩みや苦しみについて相談し、解決するにはどうすれば良いのかを質問した時、ゲシェ・ラは自分のことだけではなく、世界には多くの方が苦しんでおり、自分の抱えている悩みはそれほど大きなものではないと捉えていく方が良いというような内容を話していたと思う。私はゲシェ・ラではないのでこの言葉の本当の意図は分からないが、自身の抱える悩みや苦しみにあまり執着せずにもう少し軽く考えることで苦しみは軽減させることができるというふうに捉えた。

仏教について学ぶ前は、「現実世界は苦しく、悲惨なもの」と捉えて生きてきたことはなかったが、仏教の考え方を知って、とても納得することができた。悩みや苦しみを抱えることがあったとき、悩みの原因は執着であるということ念頭に置いて対処していくようにしたいと思う。

参考文献

- テンジン・ギャツォ ダライ・ラマ 14 世（福田洋一訳）（1996）『ダライ・ラマの仏教哲学講義 苦しみから菩提へ』、大東出版社
- 林四郎監修（篠崎滉一・相沢正夫・大島資生編）（2012）『例解新国語辞典第八版』、三省堂
- ブリタニカ・ジャパン株式会社（2016）『ブリタニカ国際大百科事典小項目電子書籍版』、ロゴヴィスタ株式会

インドの亡命チベット社会における教育とその課題

214601 安藤詩織

1. はじめに

一年を通して、インドのチベットコミュニティにてオンラインフィールドワークに取り組んできた。難民としてインドに渡った亡命チベット人たちは、ジャングルのような場所を開拓し、コミュニティを築いていった。現在では、インフラは完全ではないものの、チベット僧院や学校が兼備されており、インドのなかで亡命チベット社会は構築されている。本レポートでは、インドの亡命チベット社会の教育の課題について論じていきたい。

2. 亡命チベット政府について

現在の亡命チベット政府(CTA: Central Tibetan Administration)は、もともとチベットにおいて政府として機能しており、亡命政府となってから60年ほど経過している。中央チベット政権は、亡命チベット最高司法委員会(司法)・亡命チベット代表者議会(立法)・カシャック(行政)そして七つの主要な省で構成される。亡命チベット人の教育を司るのが文部省である。

3. インドの亡命チベット社会における教育について

文部省は、インド、ネパールおよびブータンにある87か所の学校を管理し、3万人もの児童を受け入れている。そのうち、33の学校が亡命チベット政府文部省の管轄であり、31の学校はインド政府の中央チベットスクール管理局(CTSA: Central Tibetan Schools Administration)との共同運営である。また、ダラムサラのチベット子ども村(TCV: the Tibetan Children's Village)、ムスリームのチベット・ホーム・ファンデーション(Tibetan Homes Foundation)は、文部省の指導の下で自主運営を行っている。亡命チベット社会においては、子どもたちがチベットの伝統的価値体系に根付いた教育を受けることが求められる。そのため、文部省は、教科書と教育プログラムの作成、チベット人教師の養成・採用を行う。そして、中央チベットスクール管理局がそれを監修し、文部省を支援する。受入れ国で設置されるチベット人学校は、その国の教育課程を尊重する義務があるからだ。

・中央チベットスクール管理局(CTSA)

中央チベットスクール管理局は、インドに住むチベット人の子どもたちの教育のために学校の設立や管理、支援を行っている。

1961年にインド政府人的資源開発省により設立され、2013年から亡命チベット政府文部省に管理権が移譲された。

・チベット子ども村(TCV)

チベット子ども村は、孤児や困窮した家庭の子どもを中心に受け入れている。

とくに、チベットからインドに逃れてきた子どもたちも保護している。子どもにとって家庭のような役割を果たすと同時に、教育を受ける機会を与えている。それだけでなく、チベットのアイデンティティと文化に対する正しい理解を深めることも目標としている。

1960年に設立された自治学校であり、養護施設から始まり、学校教育や職業訓練のための施設を運営するまでに規模を拡大している。

・チベット・ホーム・ファンデーション(THF)

チベット・ホーム・ファンデーションは、孤児や困窮した家庭の子どもたちのケアに取り組んでいる。現在では、子どもたちのために、58ものホーム、三つのホステル、全寮制学校とその分校を運営する。また、貧困に苦しむ高齢者のために、二つのホームを運営し、衣食住や介護を提供している。

・サンボタ・チベット学校組織(STSS)

サンボタ・チベット学校組織は、インド国内に12校を擁する。設立当初は亡命チベット政府教育省が管轄する教育省学校として設立され、1999年にSTSSへと管理が移された。

課題となるのは、亡命チベット社会における高等教育課程・職業訓練教育課程の充実である。現在、若い世代が学び続けるためには、留学する必要がある、亡命チベットコミュニティから離れなければならない。チベット社会を支えるような人材を育成するためには、若者がより高度な教育を受けられるような環境を整備しなければならないだろう。

・ラダック地方ドムカル村における人口流出（山口, 2019）

ドムカル村は、ラダックに属する。ここはインド北西部であり、チベット高原の西端に位置する。2009年には1,296人が登録されていたが、実際には半数ほどの人が村落外に居住していた。そのうちの6割以上が10～30代であり、10～20代の多くが就学を理由としていた。より水準の高い教育を受けるために村落外の私立学校に通わせたり、ハイスクール以上の教育を受けたりするために、多くの子どもたちは村落を離れるのだ。

・ラダック地方レー県のチベット子ども村（森, 2017）

このTCVスクールには、チベット人と現地インド人が通う。学校周辺にはチベット人居留地があること、現地インド人生徒に対しても経済状況に応じて授業料が免除される制度があることもあり、チベット人生徒よりはむしろ、現地インド人生徒が寄宿舎で生活する傾向にあった。寄宿舎や周辺のキャンプに住む生徒が多く、TCVスクールは教科書教育だけではない包括的な教育を提供することがで

きている。

仏教徒の現地インド人生徒は、宗教や言語面でチベットと共通の文化を持っていることから、TCV スクールを選択している。さらに、ムスリムの現地インド人生徒は、ダライ・ラマ 14 世が TCV スクールに直接誘ってくれたことを理由としている。民族・宗教を超えて困難を抱えている子どもを受け入れることで、生徒の多様性が生み出されている。

・オンラインフィールドワーク

キャンプ内の学校では、朝礼の時間が設けられていた。徒らは、チベット語のほかに英語も学んでいる。また、サッカーをして楽しむこともあるそうだ。

キャンプ内のチベット僧院では、たくさん子どもたちが修行していた。彼らは、季節ごとに学ぶのに適した場所に移動する。僧院では、チベット仏教についてのみならず、英語も学習する。子どもたちは、仲間と集団生活をする。亡命チベット社会の教育について、チベット僧院は大きな役割を担っていると言えるだろう。

私たちは、Mr. Wangda にインタビューをした。彼はチベットに生まれ、6 歳のときに 1 か月と 14 日をかけて国境を越え、ネパールに渡った。Tibetan Home School で学んだ後、インドの大学に通った。

レー県のチベット子ども村の例から、チベット難民学校は、現地インド人も包摂していることが分かった。ナショナル・マイノリティとして中国からの弾圧を受けてきたチベット人がダイバーシティ包摂に取り組むことは、ごく自然なことなのだろう。民族・宗教、家庭の経済状況にかかわらず、子どもたちが教育を受けられるような環境を整えていかなければならない。チベット人としてのアイデンティティを育む場として、チベット難民学校は重要な役割を果たす。その一方で、高等教育を受けるためには、英語を習得したり、キャンプから離れたりする必要がある。チベットコミュニティでも高等教育を受けられるように策を講じるべきだ。教育のアクセスを向上させ、チベットの子どもたちのキャリア選択の幅を広げるためだ。

4. 最後に

チベット難民学校に現地インド人が包摂されていた。チベット人自身が排除されてきた歴史を持つからこそ、他の民族・宗教に対して寛容であることができるのだと感じた。また、インドは、多くの民族・宗教の入り乱れている国である。そのなかで、亡命チベットコミュニティは、チベット人のみならず、仏教徒、その地域の住人にとっても、重要なものであることが分かった。

チベット僧院には、様々な出身の人が集まり、ともに生活し、学んでいる。コロナ禍にあったため、現地に足を運ぶことはできなかったが、現地のフィールドワークを通じて、

ダイバーシティ包摂のためのヒントを得ることができたかもしれない。

日本社会では、民族・宗教・言語に関する問題は現在そこまで注視されていない。どのように切り取るのかによって誰もがマイノリティになり得る。だとすれば、インクルーシブな社会を築く上で、民族・宗教・言語の壁を乗り越えることは必要不可欠である。とくに、教育の現場では、言語・文化の違いが問題として表面化しやすく、個別のケースに応じた支援が求められる。

参考文献

・ Central Tibetan School Administration, Government of India

<https://dsel.education.gov.in/ctsa>

・ チベットの教育, ダライ・ラマ法王日本代表部事務所

<https://www.tibethouse.jp/%e3%83%81%e3%83%99%e3%83%83%e3%83%88%e3%81%ab%e3%81%a4%e3%81%84%e3%81%a6/%e7%8f%be%e5%9c%a8%e3%81%ae%e3%83%81%e3%83%99%e3%83%83%e3%83%88/%e3%83%81%e3%83%99%e3%83%83%e3%83%88%e3%81%ae%e6%95%99%e8%82%b2/>

・ 主要な省, ダライ・ラマ法王日本代表部事務所

<https://www.tibethouse.jp/%e3%83%81%e3%83%99%e3%83%83%e3%83%88%e4%ba%a1%e5%91%bd%e6%94%bf%e6%a8%a9/%e6%94%bf%e6%a8%a9%e7%b5%84%e7%b9%94%e3%81%ae%e7%b4%b9%e4%bb%8b/%e4%b8%bb%e8%a6%81%e3%81%aa%e7%9c%81/>

・ 山口哲由, 野瀬光弘, 竹田晋也「チベットの村落を考察する比較対照としてのインド北部村落における調査報告」ICCS 現代中国学ジャーナル, 第5巻, 第2号, 2019/3/29

・ 森五郎, 澤村信英「インド北部ラダック地方のチベット難民学校: その特徴と役割」国際教育協力論集, 第20巻, 第1号, 2017

6. 授業の感想

6-1.

214658 堀テンネシー順子

〈フィールドワークの感想〉

私が初めてチベット民族について知ったのは大学一年生の頃に受けていた「人の移動とグローバルシティズンシップ」という講義で、榎木先生がチベット民族の焼身自殺について授業を行ったときである。中国から不当な弾圧を受けるチベット人は仏教の教えに従い暴力を使わずに抗った結果、若者の焼身自殺が相次いで発生したと学び、私はその後のレポート課題で、授業の感想と共に焼身自殺を行った心境に対して、絶望の中でも希望をもって行ったのではないかと書いた。その考えに正解も不正解もないことはわかっていたものの、不当な迫害を受ける現状とチベット民族の焼身自殺について後ろ髪を引かれる思いをしていた。二年生になり、海外フィールドワークの授業として、またチベット民族について仏教を含めて改めて学習することができると知り、本講義を受講することに決めた。

最初にチベット民族について、インドが亡命チベット人の最大の受け入れ国であり、南インドのカルナータカ州ムンゴットが大規模定住地であることや、インドが中国に配慮して外交上の二枚舌を使い、難民ではなく外国人として受け入れていることを学んだ。加えて、チベット仏教寺院のガンデンジャンゼ寺院は亡命後のカルナータカ州ムンゴットでジェ・ツォンカパ氏によって再建されたといった亡命チベット民族についての基礎知識を学習した。

次に、定住地内の寺院で生活する亡命チベット人の僧侶の方々にキッチン内や生活の一場面を見せていただいたり、食べているご飯を紹介していただいたりしたことで、チベット人の生活や雰囲気画面越しではあるが実際にその場にいるような体験をさせていただいた。食事中は話してはいけないことや家事炊事は当番制であるなど、そのような詳しい内部事情まで見たり、彼らにインタビューを行ったりすることで、活きた知識となった。また、寺院内で学習している四歳児のクラスも少し見ることもできた。私は、小さな男の子たちが興味津々で元気いっぱい話していたのが可愛らしく思うと同時に、自分の意思(将来僧侶になる、または仏教学を学びたい等)をもって仏教寺院で学習しているのか、定住地に住んでいるチベット人の全ての子供の教育機関が寺院であるのか気になった。質問しようと思ったが、なかなか勇気が出なかったこともあり最後まで聞くことができなかつたのが心残りである。

授業全体を通して、男性の僧侶の方々にインタビューさせていただくことが多かったが、尼僧の方々ともインタビューさせていただく機会があった。全員に、なぜ尼僧になる決意をしたのか質問し、様々な返答があった中で個人的に印象的だった答えが、突然尼僧になろうと思ったからというのであった。尼僧の皆さんが丁寧に質問に答えてくれて初対面の学生である私に貴重な話をしてくれたことにありがたかった。そのほかにも尼僧になったことで読み書きを習得することができたと話された方もいて、昔は教育を受けられない

人が多かったのか、それとも性別によって差が出ていたのだろうかと考えたものの、どこまで個人的なことを聞いていいのか距離感がつかめなかったため質問できなかった。それもまたフィールドワークならではの悩みなのだろうか。人と人が交流するのは活きた学びを得られる一方で、その土地の風習を個人の色眼鏡で判断することはいけないし、失礼にならないよう程よい距離感を見極める必要があると感じた。他にもそう思った例を挙げると、映像フィールドワークの一環として、インドのヒンドゥー教社会にあるカースト制度を学習した際に、カーストの最も外側に位置する「不可触民」の生活について焦点を当てた映像を観たのだが、不可触民に対する日常的な差別や彼らは汚染されているといった認識を不可触民ではない人々がもっていることなど、数々の衝撃的な常識が記録されていた。映像であったため、一步引いて客観的に事実を見つめやすかったが、仮に現地で目の当たりにしたらこの事実を批判なしに受け止めるのは至難の業だと感じた。

故にフィールドワークを行う人々は、柔軟な視野を持つ必要があると感じた。それがとても難しく、気づけば個人的な判断や偏見が混じって、事実をありのままに受け止められていないという状態になることに気づくことができたのが最大の学びだったと私は思う。チベット民族の言葉や歴史、亡命先での生活とチベット仏教の教えなど、迫害されている民族や焼身自殺という知識だけでなく、多角的にチベット民族について知ることができた。加えて、外国語を学ぶのが趣味の私にとって、チベット語で挨拶とありがとうの二つを習得できたのはとても嬉しかった。

〈読本の感想〉

仏教学を学ぶにあたって、物は存在するが存在していないという主張に誰もが躓くであろう。困惑する生徒に対し、ゲシェラは「そこに本があるとする。あなたは本だと認識する。しかし真の姿の本はあなたには見えていないのだ。本は存在するが存在しないのである」と例え話をした。私にはそのような例えをすぐには理解ができなかった。それどころか〈本は本である。それ以外の何であろうか〉とさえ思った。このような調子では授業に置いて行かれるかもしれないという不安を覚え、さっそく対策を練り、理解できるよう努めた。

ゲシェラと読本講義にも慣れて授業のコツをつかみ始めた七月、昨年折った骨をまた折ってしまい、自宅安静となった。本講義は Zoom 対応があったため痛みが落ち着いてから復帰することができたが、その他の講義は長期欠席となり特別課題等の配慮をしていただくことになった。何とか前期を終えることができたが、私は二度目の骨折と行動制限や痛みによりひどく落ち込んでしまっていた。どうして私ばかり痛い思いをしなければならないのかと自分を憂いていた頃、ゲシェラがある講義で、「物事には原因が常にあり、その結果が喜びであったり悲しみであったりする。よって、ネガティブな思想に陥ったり、負の連鎖から脱出できず、苦しんでいるのであれば原因を見極める必要がある。そうすることでおのずと的確な対処法が見つかる」と、原因を見つけ出すことの大切さを説いた。痛みと悲しみにばかり目を向けていた私に気づきを与えてくれた話であり、加えて、物事の

原因を考えるとという限定的な範囲ではあるが、仏教学で学習した教養を自分の身近な物事に置き換えて考えることができるようになった思い出深い講義である。余談ではあるが、原因がわかっている、その原因をどうすることもできない場合はどうしたらよいのかとゲシェラに質問した。すると、その場合はそれ以上考えたとしてもどうしようもないから受け入れることだと返答があった。私が想像していた内容ではない、シンプルな教えだったため、その時はこの返答に有効性を感じることはできなかったが、現状を受け入れることもまた、負の感情の連鎖から抜け出す有効な方法であると自身の体験から納得することができた。もし、今、負の感情の連鎖に苦しんでいる人がいたら、原因を見極めることと、時にはありのままに現状を受け入れるという二つの教えを実践してみることをお勧めする。

最後に、読本の四つの対策を記述する。今後この授業を取る生徒にとって、私のアドバイスが少しでも役に立てば幸いである。

1. そもそも仏陀の教えを理解しなければ仏教哲学の本質も見えてこない。

おすすめの方法としては、2年生の前期に「宗教学」の講義を取るか、日本テーラヴァーダ仏教協会の「渴愛」、「1. 釈尊の根本的教え 2. 四聖諦」、「八正道」を検索して熟読し、苦しみからの脱出と涅槃への道の繋がりを知ることである。

2. 間違っても私のようにアビダルマが人物の名前だと勘違いしてはいけない。

アビダルマ論でつまずいたら俱舎の第1章1「法の概念」を読むことが最適である。初めの一文から仏教用語が満載で、心が折れそうになること間違いないが、地道に調べて読み進めると、アビダルマとは何であるかを理解すると共に、仏教が論理的思考に基づいていると発見でき、難解な仏教思想が感覚的に頭に入ってくるようになる。

3. 英語に不安がある生徒は電子書籍版の教科書を買うこと。または、優秀な翻訳アプリを使うべき。

ゲシェラは基本的に教科書の内容をかみ砕いて、時には詳細に私たち生徒に説明し講義を進めるため、教科書の予習は必須である。その際に、電子書籍版だとメモ機能がついている場合が多いので、英単語の意味や仏教用語の説明などを書き込めて便利である。次に、教科書の英文を素早く理解するためには翻訳サイト「DeepL」を使うと良い。「Google 翻訳」よりも学術的な文章の翻訳は「DeepL」の方が優れている。このようにして大まかな内容理解をしておくと、たとえ会話が英語であったとしても授業の進行についていくことができる。

4. 質問は授業の前に用意しておくこと。

ゲシェラは生徒が質問をし、積極的に授業に参加してくれることを楽しみにしているため、質問が一つも出ないと悲しませてしまうことになるだろう。しかしながら、仏教学は理解するので精一杯難しい上に、その場で質問が浮かんでくることはあっても英文にできない問題や、そもそも質問する勇気が出ない場合がある。気まずい沈黙を避けるためにも、事前に質問を考えておくことがベストである。

授業で最も印象的だったことは「無常」という考え方である。何かが物質的に無くなっただとしても、そのものの概念ができてしまったら、それは永久的にはなくならないという考え方を知り、理解することができた。しかし、私は物質的に無くなってしまえばその物自体はなくなってしまう、永久的にはなくならないという考え方について納得することはできなかった。

授業中にインドの僧院の中継で僧侶たちが問答の練習をしているところを見ているときに、僧侶たちは質問されたらすぐに回答していたため、あまり難しさを感じることはできなかったが、ゲシェラと実際に問答の練習をした際に、質問されたらすぐに言い返すことができなくてとても難しいことが分かった。この問答の練習を何回も繰り返し行うことによって、論理的な思考を鍛えられることが十分に理解できた。

一年間の授業を通して、はじめの内は、ゲシェラの言っている英語を聞き取ることがほとんどできなかったが、だんだんと英語を聞き取ることができるようになっていった。しかし、ゲシェラと実際に話すときや質問するときには自分で英語を話さなければならないため、英語を話さなければならないという大きなプレッシャーがかかり、思考がストップしてしまうことが多かった。そのため、この授業を受講するに当たって、もっと英語力が必要だったと反省した。

・読本について

それまでは、宗教は非科学的で何だかあやしいものというイメージを抱いていた。しかし、この授業を通して、宗教そのものに対する考え方が大きく変わった。チベット仏教では論理的思考が求められる。その例の一つとして、四依がある。

文字ではなく、意味に頼りなさい

常識ではなく、真の知恵に頼りなさい

教えを説く人ではなく、教えそのものに頼りなさい

暫定的な意味の経ではなく、確定的な意味の経に頼りなさい

僧たちはこれに従って日々修行している。権威ある経典がそのように書いているから、高僧がそのように言ったからと、教義を説明するのではない。仲間同士で問答したり、師に疑問をぶついたりするのだ。批判的に論理的に考えることの重要性を改めて認識することができた。と同時に、宗教そのものが何だかあやしいものとは思わなくなった。授業内でゲシェラとの問答が少しあったが、論理的な返答をするのは、とても難しかった。この四依を実践するのは簡単なことではないだろうが、実践してみたい。

・フィールドワークについて

オンラインではあったが、インドのチベットコミュニティ現地の様子を見たり、尼僧らにインタビューしたりする機会を得られた。そこで感じたのは、どう切り取るのかによって考察できることは異なるということだ。その人の持つ知識や経験に左右される部分が大いのように感じた。だからこそ、事前の学習や調査が重要になるのだろう。その地域の文化や歴史、言語などを学ばなければならない。例えば、チベット僧院に女性が入れないことをジェンダー差別だと単に批判するのではなく、その慣習の成り立ちやそのコミュニティの文化について深く理解する必要があるだろう。

以上

執筆者紹介（執筆順）2023年3月現在

	* は編者
安藤詩織（あんどう・しおり）	名古屋市立大学人文社会学部国際文化学科2年
岩田芽生萌（いわた・みなも）	名古屋市立大学人文社会学部現代社会学科2年
佐藤さくら（さとう・さくら）	名古屋市立大学人文社会学部国際文化学科2年
堀テンネシー順子（ほり・てんねしー・じゅんこ）	名古屋市立大学人文社会学部国際文化学科2年
* 榎木美樹（えのき・みき）	名古屋市立大学人間文化研究科准教授

2022（令和4）年度

海外学外研修（オンライン実施）インド
：仏教学基礎とインドの亡命チベット社会

名古屋市立大学人間文化研究科「人間文化研究 H」
／人文社会学部「海外フィールドワーク A」実習報告書

榎木美樹編
2023年3月
